
嘘と革命

海猫鷗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘と革命

【Nコード】

N4707T

【作者名】

海猫鷗

【あらすじ】

傭兵ギルドの秘蔵っ子、ヨナ。

彼が雨の日に出会った少女、ジュリ。

お互い教えあった名前は偽名。

嘘の名前で呼び合う仲だが、気持ちだけは本物だと信じていた。

しかし、二人はその街で起きた革命に翻弄されていく……。

嘘と秘密、すれちがいと本当の気持ち。

もう一人の自分を隠し合いながら、それでも精一杯信じあう革命のお話。

1・雨の日についた嘘

君の名前は？

本名でも、偽名でも、構わないけど。

じゃあ……………ジュリ。うん、私の名はジュリ。

言いぶりかして偽名だろう。それでも、答えてくれたことだけで充分嬉しかった。自分の声がいつになく明るかった。

俺は……………、そうだな、ヨナ、かな。

その言い方で、彼女には本名ではないことが分かったはずだろう。けれど、彼女はやたらと神妙な顔で頷いた。

教えあつた名はどちらも本名でも、真実でもない。
所詮は、ただの虚偽であり、ただの嘘。
では、この思いは、果たして本物になりえるのか。

そんな小さな嘘。

だけれど、その嘘を二人とも大事に大事に守っていた。
その嘘が、二人の全ての始まりだったから。

その晩は雨が降っていた。けっこうなどしゃ降りで、一応傘は差していたものの、ある程度濡れるのは仕方ないと諦めざるおえないくらいだった。

まだ青年と言うよりは少年という年頃の彼が、少々物騒な界限を一人で歩くのは危なっかしく見える。腰に剣を携えているが、細くあまり安心材料にはならない。実際は、彼は傭兵ギルドの秘蔵っ子であり、そうそうやられはしないのだが。

雨が降ると雨音以外の騒音がかき消されるから、雨は嫌いではない。けれど、もう少し遠慮気味に降ってくればいいのになんて、そんなどうでもいいことをつらつらと考えつつ、路地を進む。

暗くてじめじめした路地にあまりにも不釣り合いな、見慣れない、奇妙な異物を発見したのはその時だ。

紺の使用人服。

色の薄く金髪にも見える茶色の髪。

疲れたような焦げ茶の瞳。

白く柔らかそうな肌は、泥に塗れても尚美しく。

雨を吸い込んで重くなった服に身を埋め。

彼女は、びちゃびちゃの石畳の上に座り込んでいた。

年頃は少年と同じくらいで十代前半、といったところ。

人の気配を感じたのか、億劫そうに顔をあげる。

その表情がわけもなく儂い。

触れたら壊れてしまいそうで。

このまま放つて置いても消えてしまいそうで。

少年の吐き出す息でさえ、彼女を砕いてしまいそうで。

蕩めく眠たげな眼に、意識が吸い込まれる。

見惚れていたことを誤魔化すように、少年は口を開いた。

「雨、冷たくない？」

彼女は一拍遅れて言葉を理解し、目をそらして言葉を探し、結局諦めて曖昧に首を傾げた。

「えっと……………、傘、いる？」

再び時間をかけて、今度は返事があった。

「あ……………、ううん、大丈夫。少し、眠いだけだから。」

繊細で透き通った姿とは対照的に柔らかな声だった。幽かに浮かべられた微笑が、日だまりのように温かい。

「ここは眠るのには、少し寒くて物騒じゃないかな。」

「でも、行くあてもないし。お屋敷では怖くて眠れないから。」

大きな屋敷の使用人なのだろうか。

怖くて眠れないというのはどういう意味だろう。

「貴族のご子息が夜な夜な部屋を訪ねてきて。必ずしも悪い人ってわけじゃないの。案外真面目だし……………。でも、いつの間にか、

眠れなくなつて。なんだか、怖くて。」

彼女はよく見れば、寒さに身体を小刻みに震わせている。本来、赤く美しいだろ唇は紫。呼吸は浅くか細い。

彼女の言葉に何を感じたのだろう。

彼女の表情から何を思ったのだろう。

ただ、なにか熱をもったものが身体の中に生まれた。それが、少年を突き動かす。

彼女の前に、手を差し出す。彼女は彼を見上げた。

「うちでよければ、屋根くらい貸せる。ホットミルクくらいなら出せるし、寝る場所も提供する。……どう、かな。」

彼女はじつとその手を睨む。彼女が黙りこんでいる間も、雨はその華奢な身体の上に振り続けている。膝の上で拳を握り、深い呼吸を繰り返すのを眺め、やがて少年は手を引いた。

「失礼。余計なお世話だね。ええっと、傘だけ置いていこうか？」

弾かれたように彼女は顔を上げた。

「あ、待って……、屋根、貸して欲しい、かも。ホットミルクも、迷惑じゃなければ、寝るところも。」

彼はもう綺麗さっぱり諦めていて、その予想外の答えに咄嗟に対応できなかった。

それを彼女は拒否と受け取ったのか、びくりと身をひき、綺麗な顔をくしゃくしゃにして呟く。

「……………ごめん、なさい。図々しい、ね。」

「いや、そうじゃない。」

彼女はその続きを、首を竦めて待っていた。早く安心させようと口を開くが、上手い台詞が出てこない。やがて、黙って傘を突き出した。

おずおずと傘に入る彼女の手を握る。遠慮しているのではなく、振り払われやしないかと不安で、ぎこちない動き。

彼女は顔を上げ、ふわりと微笑み、しっかりと指を絡ませてきた。その勢いに押され、少年も強くその手を握る。

その後、彼女はジュリと名乗り、彼はヨナと答えた。

その日から、少女はジュリになり、少年はヨナになったのだ。

結局その日、ジュリはホットミルクを飲んで、数時間ヨナの家の客間兼居間のソファで眠って街の朝靄の中に消えていった。

時間の経過とともに、一夜の夢かと疑いもした。けれど、台所の二つのカップがそれを否定する。ぽつぽつと数は少なかったけれど交わした会話もはつきりと思い出せた。

もやもやししながら仕事に出ると、組み手で先輩からいい一撃をもたらった。幼い頃に今は壊滅してしまった有名な傭兵団に拾われたヨナは、普段は先輩達よりも優秀だから、逆に心配された。

最近のヨナの仕事は街で採れた銀を盗賊の類から守りつつ輸送することだ。傭兵ギルドの長期の仕事を回されている。秘蔵っ子を目

立たせないためなのか、比較的地味な仕事だ。それでも、仕事中や訓練の中で思いっきり剣を振り回しているうちに気分もだいぶ切り替わる。

そうして一週間たった頃、ジュリは再び彼の前に現れた。今度は、ヨナの家の前にいた。眠そうな目を擦り、ぺたりと地べたに座り込んで。

ヨナの帰宅に気付くと、ぱあっと顔を輝かせた。

やがてジュリがヨナの家を訪れる頻度は二、三日に一度に落ち着いていた。その頃には、ヨナは家の二階の倉庫代わりの空き部屋をあけ、鍵まで渡した。不用心だとは思ったが、毎回毎回外で彼女を待たせるよりはましだった。

1・雨の日についた嘘（後書き）

あ、、、今日、雨降ってますね。

えー、一応かきあがってるんですが、全然推敲してないので、どの程度の頻度であげられるな、と思っております。
頑張りますんで、これからよろしく願いします！

2・いつもの夕食での普段と違う会話

ジュリと出会ってから三年と少しが経った。

帰り道に遠くから家を見て、灯りがついていると自然と笑みが零れる。初めはジュリの料理の腕はひどいものだったが、屋敷の厨房担当に習い始めてから着実に上達し、今では十分美味しくなっている。

「たたいま。」

「あ、お帰りなさい。」

しばらく一人暮らしだったせいか、こんな些細な会話が心地いい。以前は頻繁に疎んでいていたジュリも、随分心を開いてくれたのか、身に纏う空気が柔らかくなった。無防備な笑顔に、くすぐったい気持になる。

「えっと、今日はちょっと自信ないけど……………」

メニューを訊きつつ台所に近づくと、一転して沈んだ声で答えが返ってきた。綺麗に盛りつけられたスープ皿を二つ渡される。配膳を手伝いつつ、人差し指で掬って舐めた。

「ん、ちょっと味濃いけど、大丈夫、十分美味しい。」

「そう、良かったあ……………って、行儀悪いよ、ヨナ。」

「んー？ 傭兵団育ちだからなー。ジュリみたいにお屋敷で大切に

育てられたわけじゃないからさ。」

「それは、貴族のためだけで。私には全然いいことないよ。」

「ならいいじゃん、行儀悪くても。」

「それもそうかな……って、駄目だよ、やっぱり。いいことがないからって、身を墮としていいってわけじゃないもん。」

ぶつと顔をふくらませたジュリを見て、思わず吹き出す。つられて彼女も笑う。ジュリが手を洗い、ヨナの机を挟んで向かい側に座り、両手を合わせてから食事を始めた。ヨナは無造作にそのまま皿を引き寄せる。

ヨナの食事は早い。ジュリはゆっくりお上品に食べている。ただし、量が違うのでヨナの方がやや早く食べ終わる程度だ。

食べ終えたヨナが立ち上がり、食器を桶に浸ける。冷えてきたので、窓を閉めようと机から離れた。振り返ると、ジュリが慌てて残りを食べようとしていた。

「ああ、せかしてないから、ゆっくり食べなよ。行儀悪いよ、ジュリ。」

「ヨナに言われたくないよっ。」

「早食いすると太るぞー。」

意地悪くヨナが笑うと、ジュリは言葉に詰まり、結局それ以上なにも言い返さなかった。心なしかゆっくり食べている姿が、なんだか微笑ましい。

台所に立ち、ホットミルクを二人分作る。料理はジュリがやって

くれるが、これだけはヨナが譲らなかった。

食卓には戻らず居間のソファに腰掛けて、自分のホットミルクを啜る。これは仕事場で古くなった物を安く買い叩いたのだが、座り心地が良く愛用している。

「ヨナは食べるの早すぎるよ。身体に悪いって。」

ジュリもそう間をおかずに食べ終え、ぱたぱたとこっちに寄ってくる。真ん中を陣取っていたので少し右に寄り、場所を空けた。同時に、ホットミルクの入ったカップを渡す。

「ありがとう。」

「どういたしまして。……だからさ、俺の育ったところじゃ、早く食べないと自分の分なくなっただんだよ。」

「でも、今は別にゆっくりでいいでしょ。私はヨナの分とったりしないもん。」

「まあ、それはそうなんだけどさ。もう癖になってるから、今更そう簡単に直らないって。」

初めは寝る場所を提供するだけだった。いつしか夕飯と一緒にとるようになり、今では家族の団欒のような時間を過ごす。

「あ、今日、同僚から林檎もらったんだけど。食べる？」

「うん、食べたい食べたい。」

ジュリが顔を輝かせたのを見て、カバンの中から林檎を二つ取り

出す。適当に拭いて一つを渡したら、ジュリはナイフでするすると皮をむいていく。ヨナはさっさとかぶりつく。しゃくつと美味しそうな音がした。

「この前、練習中にそいつの腕折っちゃったんだよね。」

「ええつ、え、そ、それって、大丈夫だったの？」

「ん、ああ、いや、治癒魔法で全治三日だったんだけど。その時隣の婆さんが見舞いに林檎山ほどくれたんだって。」

「それで、お裾分け？」

「そ。奥さんに職場で配ってこいって言われたらしいよ。」

「うん、この林檎、蜜が詰まってて美味しいね。……そっかー、お裾分けかぁ。いいなあ。私のところはみんな貴族の顔色窺って神経質になってて、結構ぴりぴりしてるの。だから、そういう和やかな空間って羨ましいかな。」

「まあ、うちは特に馴れ馴れしいからなあ。」

そんなくだらない会話を夜遅くまで続けている。

けれど、互いに知りすぎないようにしているのだ。ヨナが知っているのは、彼女がどこかの屋敷の使用者で、部屋を訪ねてくる貴族の息子に怯え不眠症になり、親しい使用人の協力を得て屋敷を抜け出してくることくらい。ジュリだって、ヨナが傭兵ギルド所属で、傭兵団で育ちの、元孤児だということくらいしか知らないだろう。そして、ヨナは特に名前以外に嘘はついてはいないが、彼女も同じとは限らない。

そんな不安定な関係で、二人をつなぐのは細くて今にも切れそう
な糸だけだ。ジユリが来なくなってしまうば、彼女を捜す術をヨナ
は持たないし、ヨナが引越してしまえば、ジユリは彼を追うこと
はできない。

自然と、お互いの事情を深くは訊かないようになっていた。ヨナ
はジユリには言っていないことがあるし、彼女もきつとそうだろう。
会話の最中に、曖昧な笑み以外の返答を返さないことがある。そん
な時は、ヨナも追求はしない。ヨナが言い淀んだときに、彼女が追
求しないのと同じだ。

奇妙な関係と言えば奇妙だ。

けれど、その曖昧な距離感は心地よく、それを壊してまで近づく
勇気はなかった。

だから、ジユリの唐突な質問に思わずむせてしまったのは、仕方
のないことだと思う。

「そうだ、ねね、ヨナ。この街で革命しようって計画があるのって、
知ってる？」

思いつきり林檎が気管に入り、げっほげっほと咳こんだ。ジユリ
は目を丸くして、とんとんと背中を叩いてくれた。しばらくして、
なんとか呼吸が落ち着いてから、ジユリがコップに注いでくれた水
を一気におおる。

「えーっと、大丈夫？」

「あー、うん、なんとか……。死ぬかと思った。」

無事を確認して、黙り込んだジュリと向かい合う。なんとなく言っただけのかわからず、途方に暮れて黙り込む。

「あのさ、」「えつとね、」

同時に口を開いて、結局お互い沈黙する。

ジュリはヨナが挙動不審なことに気づいているようだが、果たしてそれ以上聞いてもいいのか、図りかねているのだろう。こうなった以上多少は話すべきだろうと思い、ヨナはどう伝えるか言葉を探した。

「あー、うん、知ってるよ、その話は。」

「そつかあ。知ってたか。そつかそつか。」

若干上目遣いになるジュリには、ヨナはそれは卑怯だよなあ、と思う。彼女には深い意図はない様子なのが余計に狡い。まあ、言っても仕方がないことだし、わざわざ口には出さないが。

「うーん、なんて言ったらいいのかなあ。」

「言いたくないなら別に訊かないよ?」

いつもなら、それで話題を切り上げる間合いだった。けれど、今日は言ってしまったかもしれない気がした。今言わなかったら、いつまでもなにも言わないままでもいいそうだった。

「いや、言うつもりは今までなかったけど、訊かれたんで言いたくなかったから言う。」

「へえ……そう、じゃあ、訊かせてもらおうかな。」

切り分けた林檎をつつきながら、ジユリはヨナに向き直る。フォークを持つ手は細く華奢で、ヨナはなんとはなしにその白い指先を見ていた。

「その革命の計画に、俺も一枚噛んでるって言ったら、信じる？」

「へええ、そうなんだ……って、え、ええっ？」

彼女は一拍開けてから眼を白黒させた。今度はジユリが軽くむせたので、ヨナは手を伸ばし、背中を軽く叩く。林檎を食べながらするような話じゃなかったのかもしれないと思ったが、残念ながら後の祭りのようだ。

「そうなの？ ヨナが？」

「うん、まあ、実は。」

「え、もしかして、偉い人だったりとかするの？」

「まさか。偉くなんてない。たいしたことはしてないし。」

「そっか、そうなんだ。ふうん、ヨナ、すつごく強くてかつこいいんだね。憧れちゃう。私は、なんにもできないから……」

彼女の丸い瞳にヨナが映っている。

嘘ではなく、言っていないだけ。自分にそう言い聞かせ、そんなことないよ、と話を打ち切る。時々そんなやりとりがある。ジユリも何かを打ち明けようとして、止めているのか。

それでいいと、ヨナは思った。

彼女の前では、ただのヨナでいたかった。

ジュリも、ヨナの前ではただのジュリでいたいなら、それでいい。

3・動き出した計画

歓楽街の中の比較的庶民に人気の酒場。

がやがやと活気に溢れ、仕事を終えた鉦山の男達が酒を入れてい
る。煙草と埃と酒の臭いが充満し、人声と楽器の音色と踊り子達の
舞う音とが混じり合い、煌々とした灯りで照らされた店内は独特の
空気をまとつ。

まだ酒を嗜むには少々若い青年が中に入り、店内の酒臭さに顔を
しかめた。それでも慣れているのか、すぐに目的の卓を見つけ、迷
うことなく一直線にそこへ向かう。

「あらら、ようやく来たわね、遅いじゃないの、大将。」

「ミヤマ、もう勝手に飲んでるよー。」

「いや、フルートは飲み過ぎだって。」

「……………うむ。」

気さくに話しかけてくる四人の男女と、

「一時間と二十七分弱の遅れですが。」

冷淡に切り捨てる若い娘、

「んにゅっ……………むにゃ。」

そして彼女の膝枕で熟睡している少年。
大将、そしてミヤマと呼ばれた青年は、四人の男女の真ん中に座

り、娘と少年と向かい合う。

「君らが問題の便利屋？」

「はい、私はヤヨイ、こっちの寝ているのがミナヅキです。身分証を出した方がいいですか。」

ミヤマはヤヨイと名乗った娘の姿を見る。滑らかな黒髪が後ろにおろされ、漆黒の瞳は鋭く光る。まとったコートはかなり上等なものだ。腰に提げた小型の鞆からは、投擲用の刃物が見え隠れしている。

次にミナヅキと言うらしい少年。ミヤマはかなり線が細い方だが、彼はミヤマと比べてもまだ十二分に華奢だ。女性的なのではなく、幼いという表現が適切だろう。結ばれた長めの髪がたれている。娘と同じコートに埋もれ、寝息を立てている。

「必要ない。それで？　どんな経緯でこの活動に参加するのか、改めて話してもらえるか。」

「ある貴族の方から、この街の革命軍の手伝いをせよとの依頼を受けました。連絡は全て遣いの者を通して行っているので、依頼主の顔は知りませんが。その依頼のため、隣の国からこの王国まで足を伸ばした次第です。」

ミヤマは皿の上に残った、最後の小魚をつまみ、口の中に放り込む。横から、それあたしの分なのにつ、という悲鳴が聞こえたが、あまり気にしない。

しばらくヤヨイの話を小魚と合わせて咀嚼し、飲み込む。小魚の方はあっさり飲み込めたが、話の方は違った。

「なんで貴族がそんな依頼をするんだ？ 手伝ってくれるなら、俺達だって革命なんて起こさずにすむんだが。」

「それは私達には分かりません。私達の仕事は依頼を完遂し、報酬をもらうことです。無論、ある程度依頼主の素性は調べた上で、相手の目的を推測してはいますが、依頼主からの信用を失ってまで貴方に語る必要を私は感じません。」

ミヤマは葡萄水で唇を湿らせてから、溜息をつく。

「なら、この話はなしだ。お前らは俺達の仲間にはできない。生憎、俺は貴族も貴族の手先も信用できないし、信用できない奴を仲間にするほど、平和な頭をしていない。」

そして、目を向ける相手を左隣に座る女性に変えて続ける。

「何か文句でも、エリー？」

ミヤマの左に座っていたのは、美しい金髪碧眼のエルフ。若く見えるものの、年齢は不明。赤黒いシスター服に身をつつみ、首元で二匹の蛇が絡み合った装飾品が揺れている。呪術による援護を担当する、邪神を信仰する女性だ。

「大将の決定に逆らうつもりはないわ。でも、私は賛成ってわけではないかしら。私達だけじゃ前衛が足りてない感じがするもの。この可愛い便利屋さん達がいれば、解決すると思うし。どう思う、ゴウザエモンさん？」

エリーは、さらに左で静かに杯を傾けていた男に振る。小麦色の肌、短く刈り込んだ黒髪、太い眉と濃い髭の偉丈夫。袖や裾がひら

ひらした東国の衣服を着ている。椅子の脇に彼の身長ほどもある大太刀が置かれていた。

「……………わしは大将に従う。わしに訊くよりハチス殿とフルート嬢に訊く方が余程有意義であろうよ。」

その言葉でミヤマの右側に座る二人組に全員の視線が行く。

一人は二十代前半の青年。少し長めの髪が肩にかかる。比較的整った顔に甘い微笑みを浮かべている。フードつきの青いローブに高めの身長。一見するとただの優男だが、その実、彼の魔術が革命軍の最大火力という、強者。

そしてもう一人、亜麻色の髪を一つ結びにした娘。鎖の付いた衣装をまとう。王国では珍しい召喚術師だ。

先に口を開いたのはフルートと呼ばれた娘の方だった。

「そう言われてもなー。あたしは頭使うこと苦手だし。んー、どのみち貴族にばれてんなら、仲間にしてもいいんじゃないの？ ミヤマの貴族嫌いは今に始まったことじゃないし、気持ちには分かるけどさ。」

フルートは言い終えると、自分の蒸留酒を煽り、店員に追加を要求した。彼女が身体を動かす度に、鎖が賑やかな音をたてる。本来は騒々しい音だが、この酒場では当たり前のようにかき消され、余韻も残りはしない。

そして最後に、ハチスと呼ばれた青年の順番である。彼は困ったように首を傾げた。

「僕みたいな成り行きでここにいる奴が最後っていうのもどうか。……いや、真剣に考えてるから睨むなよ、ミヤマ。そうだね、僕はフルートとは違って貴族に発覚している時点で油断しすぎだったと

思う。貴族側に多少怪しまれるのは仕方がないとしても、この溜まり場までばれちゃってるとね。まあ、でも。知られた上で決行するんなら、僕もこの二人を仲間にするのに一票、かな。」

ハチスは自然な動きでエリーの空いた杯に果実酒を注ぐ。エリーは機嫌良く表情を崩すが、寄りかかる相手はゴロウザエモンだった。その態度はいかにも彼女らしく、ハチスも気にせず話を進める。

「ヤヨイさん達は依頼主に定期報告とかするの？」

ヤヨイはあからさまに身構えた。ミナヅキは熟睡中、対してヤヨイは最初から隙がない。目の前の食事にも一切手をつけていないし、表情を変えることもない。

ヤヨイがしばらく黙り込むと、彼女緊張を感じ取ったかのように膝の上で横になっていたミナヅキがのそのそ起き上がった。

「…………ふああ、んんっ、おはよう、ヤヨイ。」

ミナヅキは心地よさそうに目を覚まし、大きなあくびと伸びをした。空気を一切気にしていない様子は、猫を彷彿とさせる。

あたりをきよきよと見回して、卓に並んだ食べ物を適当につまんだ。ヤヨイは無言でそれをただ見ている。

「ああ、なに、リーダー来たんだ。それで、なんでまたこんな重い空気になってるわけ？」

寝起きはいいようで、既に蒼い瞳に不敵な光を宿している。ミナヅキは少しだけ皮肉っぽい笑みを浮かべて、誰にともなく問う。

「うん、依頼主に定期報告をしなくちゃいけないのかなって。答えてくれるのはミナヅキくんでもいいよ。」

ミナヅキの全く臆するところのない反応に呆れた風もなく、ハチスは柔らかな笑顔で対応する。あまりの傍若無人さに不機嫌面を隠そうとしてもいないフルートとは対照的だ。

「定期報告？ そんなん必要ないね。報告しても、何も分からないだろうしさ。貴族と僕らなんて、理解し合えっこないし。先輩達ならその辺言わなくても分かるんじゃないの。」

「……先輩達？」

ミヤマがミナヅキの言葉に首を傾げる。ハチスとフルートは予感していたらしく、納得したようだった。逆に、それ以外のメンバーはヤヨイも含めて怪訝な表情になる。

「師匠が同じなんだよ、この二人の魔術師とはね。まあ、僕は小さい時に離れたし、ハチス兄さんは音信不通だったらしいから、実質他人だけど。戦い方の癖くらいは知ってる。」

そして彼はもうだいぶ冷めてしまった料理を次々と平らげていく。ヤヨイが微かに笑みを見せ、店員に料理の追加を頼む。

フルートは鬱陶しそうにその話題を切り上げた。

「そんなことはどうでもいいの。んで、ミヤマを説得してでも、あんたは仲間になりたいわけ？ それとも、もういいの？」

ミナヅキは食事に忙しくて聞いていない。ヤヨイが丁寧に空いた皿を重ねる音、ミナヅキの咀嚼と嚙下の音が酒場のざわめきに飲み

込まれるだけの時間が過ぎる。

フルートにとって、ヤヨイは馬鹿丁寧かつ妙な生真面目さでなかなか接しにくかった。けれど、ミナヅキはそれを遙かに上回る扱いづらさだ。

「ミナヅキ、さっさと答えな。あたしが短気なことくらいは知ってんだろうが。……おい、無視ってんじゃないぞ、チビ！」

沸点の低いフルートは早くもけんか腰で、立ち上がって卓に両手を叩きつける。ハチスとエリーが支えていなければひっくり返っただろう。ミナヅキは黙って食事を続けている。

「……申し訳ありません。少しお時間を頂けますか。」

「いえいえ、こちらこそごめんなさいね。フルートちゃん、生真面目だから。ヤヨイさん、このスープ美味しいって評判なんだけれど、どうかしら？」

間が持たないので、エリーがやんわりとヤヨイに料理を勧めるが、彼女は頑なに断って手をつけようとしない。その傍らでミナヅキは一心不乱に暴食を続けている。

「ミナヅキっ、いい加減にしろよ。横で相方の女の子が真面目に仕事してんのにお前はなに意地汚く食事してんだよ！」

ミナヅキは一瞬手を止め、フルートを一瞥したが、なにも言わずにまた食事を再開した。

それにフルートは激昂し、乱暴に立ち上がった。エリーとハチスが止める間もないほどの俊敏な動きで、フルートが卓の反対側のミナヅキに向かって身を乗り出す。卓がひっくり返らなかったのは、

人知れずゴロウザエモンが下から支えていたからだ。普通なら、料理もろとも弾き飛ばされていたはずである。

ミナヅキは冷静だった。ただ単に食事に夢中だったようにも見えた。手つかずだったコップを掴み、上手くスナップを効かせ、見事にその中の水をフルートの顔面にかけて。完璧なフォームで弾き出された中身は綺麗に彼女の顔にかかり、服を濡らすこともないという素晴らしい腕前である。

端から見ていた四人はもちろん、当のフルートでさえも呆気にとられてしばし沈黙する。そしてフルートが再度怒りだす寸前でミナヅキは口火を切った。

「とりあえず、フルート姉さんは頭を冷やした方がいい。えー、まず、僕は背が低いけど成長期が遅いというか、時間を悪魔に売り渡していたんだよね。今、十九だけど身体は十四前後なんだよ。最近リーチが変わって戦いにくくて困るくらいの成長痛に悩まされてるから、すぐフルート姉さんの身長を抜くはずだ。」

フルートはその場で棒立ちになっている。ヤヨイは前のめりになっていた身体を静かに背もたれに戻し、ハチスはフルートをさりげなく席に座らせた。ミナヅキは言葉の合間合間に食べ物を口に運んでいる。すでに異常な量を摂取しているはずだが、その動きはよどみない。

「あと、姉さんが短気なのは知ってる。忘れちゃいけないよ。んで、ヤヨイが働いてる中、食事したり寝てたことだけ。」

そこで初めて彼は口内に食物を運び続ける作業を止めた。くるりと隣のヤヨイを見て一言。

「まだ足りない？」

「ええと……若干。」

そして機械的に食事を再開させる。むしろ食事と言うより食物の摂取といった方がいいかもしれないくらいに作業めいた動きだった。手持ちぶさたになったのか、ハチスはにっこりと人懐っこい笑顔をヤヨイに投げた。ヤヨイは困ったようにミナヅキを見やり、けれど人並み以上に整ったハチスの顔で微笑まれると、満更でもないのか若干表情を崩した。

すると、おもむろにミナヅキが食べるのを中断し、話を始める。ヤヨイとハチスが見つめ合っていた状態が氣にくわなかったのだろう。

「僕の妻は半分ほど人外なんだ。半魔つて言えば伝わるかな？ 父親が悪魔、母親が人間の、人と悪魔の混血児だね。」

唐突に正体を明かされて、ヤヨイが身を固くした。ミナヅキは横目でその様子を見ていた。ヤヨイの握りしめた拳にミナヅキはそつと手を添える。

「へえ、ご夫婦だったの。美人で有能な奥さんと、可愛らしいながらも頼りになる旦那さんね。姉さん女房、ってやつかしら。」

エリーが何気なく口を挟むが、

「言つとくけど、僕の方が年上だからね。」

あっさり一刀両断されて終わる。また噛みつこうと腰を上げたフ

ルートをハチスがなんとか宥めすかしていた。

「主食は僕の睡眠。普通の食事もできるけど、効率が悪い。んで、それだけじゃなくて、僕の睡眠不足や空腹が彼女の体調に影響する。ヤヨイが腹空かしてたから、僕は起きて飯食ってる。僕は別にヤヨイそっちのけで寝たり食事したりしてるわけじゃない。そもそも僕が大概自分の身体を省みないのは昔からだ。それくらい知ってたんだろ？」

言いたいことを言い終えると、彼はまた食事に戻る。しかし、さっきまでより少々不機嫌そうだった。

それからしばらく、フルートは俯いたまま、黙り込んでいた。エリーはやれやれと杯を重ね、ゴロウザエモンはあくまでも無言。ミヤマは目を閉じ腕を組み、なにやら熟考している。ハチスの適当な世間話にはヤヨイがミナツキの様子をチラチラと見ながら、気まずそうに付き合っていた。

ようやくミナツキが皿を全て空にして、再び切り出す。

「さて、ヤヨイの正体も明かしたし、できれば仲間にして欲しいんだけどね。ハチス兄さんはなにやらしい案があるみたいだね？」

「ああ、ようやくのつてくれる気になったんだね。うん、見も蓋もない話なんだけど、僕が二人をその貴族以上の値段で雇おうかと思つて。」

ハチスはにこにこ笑顔を絶やさない。

「ミナツキくんの腕は知ってるし、ヤヨイさんも多分強いでしょ。しなやかで綺麗な体つきをしてるもん。それに魅力的な女性だからね、是非とも仲間になって欲しいな。いてくれるだけで目の保養に

なるよ。」

ヤヨイの手を取って彼は微笑む。目を見開いて僅かに頬を染めたヤヨイを、ミナヅキが不機嫌そうに抱き寄せた。

「今の依頼主の五倍出せ。」

「うーん、僕は百二十%くらいのつもりだったんだけど。」

「精々三倍だな。ある意味裏切れつつてんだから。」

「実際やることは一緒でしょ。一・八倍は？」

「打ち合わせの時の飯代はそっち持ちで二倍。」

「んー、いいよ。交渉成立。ただし、こっちの命令優先ね？」

「分かってるよ。」

兄弟二人で悪巧みでもしているような、あつという間の出来事。どうやら、二人はこの妥協点を前もって想定していたようだ。ハチスはいつも通りの笑顔でミヤマに告げる。

「ってことで、仲間に入れていいよね、ミヤマ？」

ミヤマは答えない。仏頂面で二人の便利屋を見定める。ミナヅキは不遜な態度でにらみ返し、ヤヨイは背筋を正して生真面目に返事を待つ。ゴロウザエモンは相変わらずの厳めしい硬い表情。フルートは久しぶりにあった弟弟子に見事にやりこめられたのが不満なのだろう、頬をふくらませている。エリーはにやにやと、ハチスには

ここにこと笑っている。

「ほら、大将、もう答えは一つなんじゃないの？」

「ミヤマが嫌だつて言うなら僕は従うけどね。即座にこの場で解約。この二人には直ちに出て行ってもらう。別に僕はそれでも構わないよ。リーダーはミヤマなんだしさ。」

この二人は大概意地が悪いと、ミヤマは思う。ミヤマがどうするか分かった上で選択肢を与えているのだから。

粘ってもどうせ同じことだ、さっさと答えた方がいい。

「分かった。いい。仲間にもなんでもなれ、好きなようにしろ。」

投げやりに回答すると、にやにや笑いをさらに嫌みつたらしくさせて、エリーが催促する。

「ほら、大将。新しい仲間が増えたらいつものあれをしないと。」

一瞬ミヤマは苦虫を噛み潰したような顔をしたが、ハチスもこちらをじっと見て精神的な圧力をかけてくるので、やけくそ気味に声を張り上げた。

「君たちは今この瞬間から俺らの仲間だ。貴族に奪われ、盗まれ、蹂躪された僕らの自由を共に取り戻そう。俺達は一心共同体で、運命共同体。一人が苦しめられることは全員の苦痛と等価であり、仲間の死は自らの身体が扱われることと同義で、自身の血と仲間の血は同等。全員が望むものは全て唯一つ、自由のみ。俺達の進む道は同じだ。何処に行き着くかまだ分からない。ただ、全てが終わった時に、共に自由なこの街に立てていることを願おう！」

立ち上がって大仰な台詞を言い終え、ミヤマは右手を差し出す。
ミナヅキが先にそれを握り、ヤヨイがそれに続いた。

周囲から歓声があがる。

この酒場を使う人間は皆革命軍に参加しており、多少なりとも話に耳を傾けてはいたのだ。多くの仲間に聞こえるよう、彼らはいつも店内中央の卓を使っている。ちなみに、この作戦会議という名の飲み会では女性の率もなかなかだが、酒場にいる人間、そして革命軍のメンバーはほとんどが男だ。鉱山の屈強な野郎共の中にはドワーフの姿も混じっている。

新しい仲間を歓迎する酒盛りがただのバカ騒ぎになった頃、再びミヤマは席に座る。

「まったく、毎回なんでこんな恥ずかしい台詞を言わなくちゃならないんだよ。絶対いらないだろ。」

頭を抱え、低く呻く。ハチスは果実酒の入ったグラスを上品に傾け、適当に慰める。

「いやいや、雰囲気って大事だよ。それにわりとカッコいいよ、ミヤマ。」

「……………ハチス、絶対他人事だと思ってるだろ。」

「思ってるよ。実際、僕のことじゃないし。でもしょうがないよ、ミヤマ以外の初期メンバーがそういう雰囲気を大切にしたんだから。リーダーだろ、頑張れって。」

作戦会議に出ている七人の中で、初期メンバーはミヤマだけだ。他に、坑夫達を率いているドワーフのおやじや、この酒場の店主、宿の女将などが初期メンバーだが、彼らは戦闘は詳しくないと言って早々に作戦会議から外れていった。

「……………そもそも、お前やフルート、その二組の夫婦の方が俺よりずっと強い。なら、俺よりリーダーに相応しいのはそっちだろ。」

「強弱だけじゃトップは決められないよ。僕は協調性ないし全体の様子見る気もない。指揮とか絶対できないね。」

「私もそっち系は全然駄目ね。大將は立派だわ。一番若いのに見事な手腕だし。うち旦那の次くらいにかっこいいわよ。」

重要な話が一通り終わると、酒気にあてられたミヤマが愚痴っぽくなるのが常だった。それまで尊大に振る舞っていたが、途端にずるずると椅子から落ちそうな姿勢になる。店の天井を心細そうに見上げて、言い訳のような泣き言を口走る。

「後衛のくせに、ハチスもフルートもエリーも俺より接近戦強いし。ゴロウザエモンは組み手で一步も動かないし。」

卓の違う人間には聞かれないような声は小さいが、それは意地がそれとも臆病な心故か。見守るエリーやハチスの眼差しは温かい。

「経験の問題よ。他はともかく、私と旦那はいい年だもの。年期が全然違うわ。……………組み手に行きましょうか？」

「うん、移動しよ。あ、その二人もついて来いよ。あたしらがい

「ごいてやるから。」

新参者の二人は小首を傾げる。こんな弱気になった相手に本気でかかっていいのかということだろう。負ける気はなさそうところが彼らしいが。

「俺のことは好きだけ叩き潰してくれて構わない。成長の実感はあるでないけど、学べることが多いのも分かってるから。」

席を立つ彼らは、訓練に行くと言うよりも二次会に向かいそうな雰囲気だった。

店から出て夜道を歩きながら、エリー達飲酒組は酔い軽くを覚ます。

「……彼はいつもあんな感じなんですか？」

ふと、先頭を歩くミヤマの背を見ながらヤヨイが隣のフルートに訊いた。

「ああ、そうだよ。まあ、色々きついだろっし。こっちもできることはしてるけどさ、たかがしれてるし。でも……。」

説明の仕方に困ったのか、フルートは途中で言葉を切った。思考に集中し、言葉を切った彼女を見て、エリーが引き継ぐ。

「本人が望んで進んだ茨の道よ。望むだけ傷ついて、自分が満足できるまで突き進めばいいわ。大将にも大将なりの考えがあるんだろっしね。」

フルートの言いたいこともそんな意味のことだったのだろう。こ

くこくと頷き、肯定している。

温まりつつあった空気を冷やしたのは、ミナヅキだ。

「でもさ、成功しても全員の願いが叶うわけじゃないだろ？」

暗い道である。離れた人間の表情はよく見えない。それでも、ぴしゃりと返したエリーの顔は、何故か全員が視えていた。

「少年、発言には気をつけなさい。全員の望む自由が同じだとは私も思っていない。けれどね、少なくとも全員が同じように自由と呼べるものを望んでいることは確かなのよ。私達にはそれで十分だわ。」

それはさばさばした口調ではあったが、ミナヅキを含めたその場にいた全員を黙らせるほどの威力を秘めていた。

3・動き出した計画（後書き）

人がたくさん出でてきましたが、次回は普通にヨナとジュリの場面に戻ります。わいわいした感じが出ればいいなー、何て思ったり。

4・蜂蜜入りのホットミルク

ヨナが家で適当に夕食をとっていると、ジュリが静かに入ってきた。彼女がヨナの帰宅の後に来ることはほとんどないので、勝手に今日は来ないのだろうと思っていた。少し意外に思いながら声をかける。

「こんな時間に来るなんて珍しいね。ジュリの分作ってないんだけど、どうする？ なにか買って来ようか？」

質問しつつも、ほとんど買ってくるつもりで席を立つ。外套を掴もうとした時にようやくジュリが答えた。

「いい、いらない。お腹空いてない。」

それだけを吐き出すのが精一杯といった様子だった。彼女は引き留めかけたヨナの手を猫のようにすり抜けて、二階に上がって行く。いつになく心ここにあらずといった姿だ。出会った時も繊細さを人の形にしたような気配を帯びてはいたが、今の彼女は美しい抜け殻のようだ。

彼女が自室の戸を閉めた音で、ヨナは我に返った。

「あ、ちょ、ジュリ、ホットミルク、いる？」

階段を半分ほど上り、大きな声で訊く。返事はない。余計に不安になる。二階に上がり、扉を軽く叩きながら繰り返す。

「ジュリ？ ホットミルクならすぐ作れるよ？」

しばらく待ったが、返ってくるのは沈黙ばかりだ。諦めて下に戻り、勝手にホットミルクを作る。少し悩んで、いつもは入れない蜂蜜を投入。コップを二つ持ち、二階に上がる。

「入るよ？」

特に制止の言葉もないので戸を開ける。

そこは、部屋の主が少女だとは思えないほどに殺風景な部屋だった。彼女はここに来て眠るだけで、生活しているわけではないのだから、それもまあ当然かもしれない。

靴を履いたまま寝台にうつぶせている。両手でシーツを強く掴み、頭を枕に埋めていた。

泣いているのかと思うほど、沈み込んだ様子にとっさに言葉を飲んだ。途方にくれて部屋の前で立ち尽くしていると、ゆっくりと顔を上げヨナを見た。

「どうしたの？ なにかあったの？」

ヨナの存在に気づくと同時に、ジュリの表情が切り替わる。先程までの張りつめた姿は見せなくなかったのかもしれない。

怪訝そうにこちらを見つめ、逆にヨナの心配をする。何事もなさそうな顔でこちらを向いた彼女は、辛いことを隠すのが人一倍上手い。それをヨナは知っている。これは、彼女の得意な作った表情だ。

「いや、それはこっちの台詞だよ。突然来て、二階あがって、返事しないからさ。さすがに俺だって心配になったんだよ。なんでもないなら俺は下に戻るけど。食事中だしね。」

少し棘のある言い方に、ジュリは虚を突かれたようだ。慌てて歩みより、ヨナの腕を掴み、上目遣いで顔をのぞき込む。

「え、ごめん、すごい真剣に考え事してて。……………心配とか、してくれたの……？」

自信のない様子に、むつとした。そんなに自分達は素っ気ない関係だと彼女が思っていたら、それはちよつと信用しなさすぎではないだろうか。若干苛立ちを覚え、自然と声が大きくなる。

「あのさあ。」

いつもよりも低い声に、ジュリが一瞬にして竦み、目に見えるほど怯えたことで自分の無神経さに気付き詫びを入れる。

「……………あー、ごめん。」

我ながら無神経だった。そもそもジュリは、毎晩部屋に訪ねてくる貴族のご息子が怖くてここに逃げて来ているのに。自分はジュリの助けになりたいのに、こうやって脅えさせてしまった。一瞬膨らんだ苛立ちはすでに跡形もなく消えている。残ったのは情けなさといいたたまれなさだ。

ジュリは謝らなくていいと首を振るが、やはり震えが隠せていない。何度か言葉を探して口を開閉させ、とりあえず手に持ったカッブを片方渡す。ジュリはそれを両手で抱え込むように持つ。一度部屋に入り彼女をベッドに座らせる。それからヨナは廊下に出て、一定の距離を置いた。ヨナが男だと言う事実だけでも、今の彼女には恐ろしいことだろうから。

そして、今度はできる限り穏やかで優しい声を意識して、口を開いた。

「あー、だからさ、もう三年以上の付き合いになるだろ。今日は見たことないくらい疲れてみたいだったし。その上なんも言わずに部屋直行するからさ。そんなこと初めてだから俺だって心配くらいするよ。うん、だから……………、心配とかしてくれたのってのはちよっと頭来た。」

「……………ごめん。」

「細かい事情は別に話したくないなら訊かない。でも、なんか嫌なことがあった、ってことだけでも言っただけでもいいかな。ホットミルクくらいなら出せるしさ。」

一通り自分の言い分を語り尽くし、ホットミルクに口をつける。まだ結構熱い。ジュリはかなりの猫舌だから、当分飲めないのだろう。

彼女は俯いてカップの中を見つめていた。いや、カップの温度で指先を温めていたのかもしれない。

「……………ん、つとね。明日から二週間くらいかな、少し遠くに出かけるの。だから、しばらく来れない。」

こうして前もって報告されるのは初めてだが、彼女の遠出自体は何度かあった。突然ぱたりと訪ねてこなくなり、しばらくするとまたふらりとやって来る。だから、それだけの理由で彼女がここまで荒れるとは思えない。こんなにも彼女が情緒不安定になるのは、もっと他にも原因があるはずだった。

案の定、ジュリは続けた。

「でね、んー、どこまで言おうかな、その、ちょっと人と会うんだけど。それが気が重い、っていうか。」

「苦手な人ってこと？」

「……………そうじゃないよ。偉くて良い人。でもね、うん、用件がすごく大事で。だから、重くて。」

この話題は有耶無耶にしたいのだろう、よくあることだ。ヨナはよく理解していなかったが、適当に相づちを打った。

「なんかね、今回は私が自分で行きたいって言ったんだけど、気が重くて、たまに全部投げ出したくなっちゃうの。」

曖昧にしたい話題の時、抽象論に持つていくと空気が重くならずに済む。それはここ三年間で二人が学んだことだ。今回は今までと比べるとだいぶ具体的に話した方だ。単に、これ以上は話せないと言うことなのだろう。

「でね、そういう時に限って大事な仕事があったりするの。」

実際、ヨナも最近面倒になってばかりだ。仕事も革命軍の雑用も、度重なる用事に疲労が溜まる。

「それで、そういう時の仕事に限って、前に自分が望んで頼んだものだったりするんだろ。」

「そうそう、今更投げ出せないし。だからこそ、投げ出したくなるのかもね。」

「駄目って分かってることって、逆にやりたくなるんだよ。他人が真面目に出席してる時に一人でサボることほど気持ちのいいものはない、だろ？」

「そうなんだよね。うん、なんでだろうね？」

「さあ？ 人間ってのはもともと悪い生き物なのに、悪い生き物が、身を守るために善人の振りをしてる、とか。」

「だから、権力を握ると安心して力に溺れるのかも。」

「そうだよ、きつと。この街の貴族達もそうだけどさ。大きい力を持ちながら善良であることは、難しいんじゃないかな。ろくな貴族なんていないだろ。あいつらはさ、自分のことしか考えてない。家の財産を増やして、名のある家と血縁関係を結んで、領土を広くして、って。」

貴族なんて奴らは大概ろくでもないのばかりだと、ヨナは思う。自分の利益、家の利益、そんなことばかりを追いかけて、自分より下の層にいる人間のことを省みない。

「この街の前の領主の、キュピレアナ家だっけ？ その人達はいいい人だったって話をたまに聞くけど、今となっては落ちぶれて成金貴族に領地をとられてるんだから、所詮ろくでなしだ。現領主のシロガネ家は言わずもがな。俺からすれば、あの一族を放任している王家だって大差ない。」

ふと、熱くなりかけている自分に気付く。そしてジュリが黙り込んでいることにも。見れば、俯いてカップの中のホットミルクをじ

つと睨んでいる。まだ熱いのかと、自分の分を口に含む。それは予想以上にぬるくなっていた。

「ジュリ、そろそろ飲まないと冷めるよ。」

そつと忠告すると、弾かれたように顔を上げる。

「あつ、うん、飲む。ごめんね、なんかぼうつとしてて。一人で用事のこと考えるとなんか憂鬱になるんだけど、ヨナの声聞いてると安心して悩めるから。それでいろいろ考えてると、なんかそつちに集中しちゃって。」

「いや、別にいいけどさ。」

自分の他愛ない話が彼女に安心を与えられるのなら、それは願ってもないことだ。

「考え事するのはいいんだよ。ただ、冷えたホットミルク飲むのって地味に惨めな気分になるからさ。」

くすくすと笑うジュリを見て、ほつとする。泣き顔よりは怒っている方が、怒っているよりも笑っている方がいい。ジュリの笑顔は、ヨナに力をくれる。

「じゃあ、惨めにならないように……。」

ジュリがカップに口をつける。こくりと嚥下し、驚いた表情を見せた。

「甘い……。」

「今日は誰かさんが随分参っているようだったからね。特別に蜂蜜を入れたから。甘いものって元気であるだろ？」

「……………うん、元気、出るね。」

「俺はたいしたこととしてあげられないんだけど。それでも、ちょっとでもジュリの支えになればいいと思ってるんだ、これでもね。」

「ずっと、支えられてるよ。」

「そりゃ良かった。」

声はおどかせていた。でも、気持ちは心底安堵する。ジュリの支えになれていたなら。いろいろな苦労も全て報われる気がした。

「……………むしろ、私の方こそ、ヨナになにもしてあげられてないよ。全然、私はなにもできてない。」

「なんもしなくていいよ。俺は、ジュリがそこにいてくれるだけで安心できるし、気が休まるし、気持ちが暖かくなるんだ。俺はジュリにいっぱい暖かいものをもらってる。」

やや求婚の言葉のようになってしまったが、この気持ちは嘘じゃない。

ジュリはホットミルクを啜り、幸せそうに溜息をつく。そんな何気ない所作もどことなく洗練されていて、ヨナには眩しいくらいに美しく見える。

ジュリはしばらく黙ってちびちびとホットミルクを舐めるように

飲んでいた。考えをまとめているのかもしれない。

そして、突然残ったホットミルクを一気に飲み干し、なにか決意したような顔をした。今までの自信のない様子からは想像もできないほど、凜としていて、彼女のなかでなにかが変わったのがヨナにも伝わってくる。

ヨナを見上げ、寝台の横をぼんぼんと叩いてきた。しかし、さっきの失態が脳裏をよぎり、ヨナは丁重にお断りした。代わりに部屋に入り壁により掛かって話を聞く体勢を作る。ジュリもそれ以上は繰り返さず、そんなに真面目な話じゃないんだけど、と前置きした。

「ヨナは革命軍に入ってるんだったよね。」

「ん、ああ、そうだけど。」

「なら、いい情報。偉い人にでも伝えて。半年後にシロガネ家が結婚式をするの。いずれ市民にも伝えるだろうけど。その日、お祭りの振りして革命起こすといいよ。準備で人が集まっても、祭だからって言えるでしょ。正式な式は後日王都でするから他の街の貴族はいないし、街の貴族はそこに集まるし、王家に親書出すとか仕事がいっぱいあって、警備が手薄になるから。」

初めて見る、ジュリの鋭い表情に、ヨナは息を呑む。それを知ってか知らずか、ジュリはすぐにふにやりと力を抜いた。

「……………なんか、ヨナに言われて気付いたけど、自分で思ったよりもずっと疲れてみたい。小さな気配りが温かくってさ。でも、自分でやりたくてやってることだし。投げ出したくはなるけど、投げ出せないんだよ。」

軽く伸びをして、ジューリは微笑む。

「それに、ありがとう、悩み事、全部ヨナと話してて解決しちゃったよ。」

「俺はなにもしてないけど。悩みの内容すら聞いてないし。」

「いいの。全部、ヨナと話して私の中でまとまっただし、覚悟もできた。だから、ありがとね、ヨナ。」

来た時と比べると、だいぶ元気になったようだ。その様子にヨナが肩をなで下ろし、空になったカップを受け取る。

瞬間、彼女は抱きついた。

ヨナの胸に顔を埋め、やがて離れた。

その間、両手が埋まっていたヨナは、眼を白黒させることしかできなかった。

「うん、ほんとにありがと。明日出かけるから、本当は今日は来るともりはなかったんだけどね。なんか来ちゃった。来て、良かったよ。明日の用意もあるし、屋敷に戻らなきゃ。」

そう言い残して、彼女は階段を下りていく。ヨナも我に返ると急いであとを追いつ、家の外に出たが、既にジューリは夜の闇の中に消えていた。

5・令嬢と侍女の会話

貴族の屋敷の一室。比較的質素な内装だが、それでも庶民の数年の生活費では済まないような金額がかかっている。大きな寝台には軽く温かい羽根布団。落ち着きのある色調の絨毯も繊細な意匠がこらされているし、壁に掛けられた大型の鏡も非常に高価なものだ。

その部屋には二人の娘がいた。貴族の令嬢とその侍女である。令嬢は領主の子息の婚約者だったが、今日からしばらく所用で出かけるため、衣装を侍女に着せてもらっているところだった。

「はい、お嬢様、できましたよ。」

きつく締めたコルセットや、つま先が細くかかとの高い靴は着ている者に苦痛を強いる。しかし、令嬢は慣れた様子で、鏡の前に立ち、小さく頷いた。

「ありがとう、ロゼ。」

「もっと高価な衣装でもいいと思うのですけれど、お嬢様はあまり派手なのは好みじゃないでしょう？　なので、大人しい雰囲気でも細かいところで手の込んだ装飾があるものを選びました。」

「ええ、気に入ったわ。」

侍女のロゼは令嬢の髪に櫛を通し、丹念に梳かしていく。やはり華美な髪飾りを嫌がる主人のために、髪を結いあげ、飾り付けない方が美しく見えるように整えていく。令嬢はその間、静かに椅子に座っていた。

ひどく穏やかな瞳で、彼女は一体何を見ているのだろうか。窓の外に視線をやり、少しだけ物憂げな表情をした。

「その……お嬢様、本当に行くのですか？」

ロゼの問いに、令嬢はしばらく答えなかった。

一見風いだように思える彼女。その心には静かに、けれど確かな炎がごうごうと燃えていることを、ロゼは知っている。今回の外出の用件に関して、彼女がどれだけの覚悟を持って、決断を下したのかも知っている。主人の決意を疑うような発言は、使用人としてはならない。けれど、彼女と互いに幼い頃から親しくしてきたロゼとしては、どうしても訊かずにはいられなかったのだ。

ロゼが髪を結び終わろうとした時にようやく、令嬢は口を開いた。

「ええ、行きます。」

凜とした宣言を嚙下しながら、ロゼは主人の髪に控えめな髪飾りを差す。少し後れ毛がでたので、またそれも整える。

「ロゼ、貴方が私だったとしても、きっと同じ結論にたどり着いたはずですよ。」

「そうでしょうか？」

彼女のように高潔な、そしてある意味残酷な決断はできないと思う。そこまでロゼは強くない。そしてもっと自分勝手だ。けれど、主人はそうは考えていないようだった。

「ええ、そうよ。だって例えば、貴方の恋人の騎士さんが、なにかとても大きくて立派なことをしようとしていたら、ロゼはそれを支えてあげたいと思うでしょう?」

「勿論です。出来ることならなんだってします。」

ロゼは恋人の姿を思い浮かべる。彼は、正確には傭兵なのだが、通称騎士と呼ばれる仕事をしている。凛々しくて生真面目に、剣を携えて周囲を見張る勤務中の背中では、見ているだけで安心感を覚える。実直で口下手な彼が、ロゼは好きだった。

「それと一緒に。私にも大切な人がいる。だから、私はその人のために、私に出来る全てのことをする。それだけのことだわ。」

そう言いきるロゼの主人は、とても気高く、そして同時にまるで今にも消えてしまいそうなくらいに儚げだった。

6・強くなりたい

傭兵ギルドの集会所には、妙に広い室内訓練場がある。お世辞にも規模の大きいとは言えないこのギルドの訓練場には、もったいないくらいの広さだ。今はギルドのメンバーだけでなく、革命軍に名を連ねた者もまばらに入り、各々思い思いに訓練に勤しんでいる。

体内に燃えさかる炎でもぶち込まれなんじゃないかと疑ってしまふほどの凶悪なまでの熱を持ったミヤマの身体を、だだっ広い訓練場の床がゆっくりと冷やしていた。吐き出す息が腕に当たり、それがまた熱い。何度か咳き込みながら、熱を体外に出し切ってしまったおと、荒い呼吸を繰り返した。

ミヤマを床に叩きつけた張本人は呆れ果て、しゃがみ込んで床にへばりついているミヤマに顔を近づけた。

「大将、もういいんじゃない？ あんまり自分の体いじめすぎると、体壊しちゃうわよ。」

「……………吐いてくる。」

エリーの忠告には一言も返さず、よろよろと外に出ていった。室内では仲間たちが各々にあった相手と組み手をしている。窓は全部あけられているが、中で大人数の男どもが激しく打ち合っているわけ、かなり暑い。今日はフルートとハチス、エリーが交代でミヤマの相手をしていて、小一時間ほど続いていたミヤマがへばったところだ。

「エリー、おなか殴っちゃだめだよー。ミヤマただでさえ吐きそうな顔だったのに。」

「一回だけよ。貴方みたいにはかばか殴ってはいないわ。」

「んー、エリーの場合、回しすぎなんだよ。んで、フルートは殴りすぎ。そんなのと交代でやってたらミヤマでなくても吐き氣ぐらいするでしょ。」

「うるさいな、ハチスが神経逆撫ですぎたのも悪いし。あれでミヤマ、引っ込みつかなくなっただよ、絶対。」

三人組の方は呑気なものだが、帰ってきたミヤマの方は憔悴きつていた。それを見て、さすがのエリーも注意する。

「ちよつと大将、本当に大丈夫？ 今日のもうこれくらいにした方がいいんじゃないの？」

「……………いや、まだいける。」

意地を張っているが、どこからどう見ても無理そうだ。さつきよりも顔色は悪くなっているし、足下もおぼつかない。頭から水を被ったのかと思うほど汗もかいているし、まだ呼吸は若干荒いようだ。

「体調管理できないといつまで経っても強くなれないよ。」

「そうだよ、あたしなんか、無理して組み手やって師匠に殺されかけたことあるもん。いやー、あれはかなりヤバかったね。死んだかと思った。」

ハチスとフルートが口をあわせる。フルートが何故少し誇らしげなのか、ミヤマにはちよつと分かりそうにない。

「僕らも手加減そんな上手じゃないし、僕らとミヤマは体術の実力自体は大差ないから、手を抜きにくいんだよ。このまま続けててもミヤマに怪我させちゃう。余裕ぶって見えるのかもしれないけど、ミヤマを怪我させないように叩き潰すのってかなり大変なんだよ？」

あくまでも、ハチスは自分達の実力の方が上だと理解して話を進めている。ミヤマにもそれは分かっているが、淡々と当然の事実として語られると少し悔しい。

「あ、今悔しいと思ったでしょ。大将って合理的ぶってるけど、結構感情的よね。」

しかも、エリーに見透かされているというのがまたミヤマ的には気に食わない。彼女のにやにや笑いと楽しそうな口調も。思わず仏頂面になりかけて、そうすると余計に彼女を喜ばせるだけなので、ため息をついてごまかした。

「一応これでもリーダーだから。俺が一番弱かったらかつこつかないだろ。」

若干、拗ねた言い方になったのは非常に不本意だったが、向こうの方が年上だし、と開き直る。ハチスとエリーは性格こそ悪いが、こうして本音を言っているときに意味なくからかうことはないのだから。ミヤマが素直に内面を吐露すれば、彼らは真摯に応えてくれるだろう。それは分かっている。だが、わかっているからこそ、素直に弱音を吐くのはやはり悔しさを伴うのだ。

床に座っていた三人の横にしゃがむ。座ると改めて疲れがどっと押し寄せ、しばらくは立ち上がれないと確信した。全身が鉛のよう

に重い。床に身体が沈んでいくような気さえした。

「言っとくけど、勘違いしないでね？ 大將は十分強いわよ。私達の相手ができるわけだし。私なんか、手加減下手だから一瞬で叩き潰しちゃったりするもの。」

「そうだよー、つつい、力業でどっかーん、って。ミヤマとだとりあえずそれはできないよ。」

エリーに同調するフルートの言い分も、理解はできる。ミナヅキやヤヨイ、ゴロウザエモンは手加減すらお手のもので、よく革命軍のメンバーに組手を通していろいろと教育している。逆にフルートとエリーは指導と言うよりも一方的にねじ伏せてしまいがちで、端から見ても教育係には向いていないのだろうとわかるくらいだ。

だが、その後に続けたハチスの意見はミヤマの想像すらなかったものだった。

「だいたい、強くなると別の側面が弱くなるんだよね。ミヤマくらいが一番バランスいいんだよ。僕らがミヤマに特に指導しないのは、そういうことでき。別にミヤマは今のまま戦場に投げ込んでもそう簡単には死なないし。それより、下手に強くなって、弱くなったら困るからさ。」

そんな風にミヤマは考えたことはない。納得できず、首を傾げると追撃がきた。

「あたしは他にも強い人知ってるけど、みんななんか不安定なんだよね。人まとめたりって、絶対できないの。」

「ああ、そういうのってあるわね。こう、人恋しいのに関わり方が

分からない、みたいな態度で。」

「僕らもわりとそうだけどね。ミナヅキくんとかさ、人間関係はほとんどヤヨ伊さんに任せちゃって、彼自身はヤヨ伊さん以外と関わろうとしないでしょ。仕事の時はたまに入ってきて、ヤヨ伊さんの話全部とってっちゃうけど。」

「うちの旦那も結局はそんな感じよ。黙って意見しないけど、みんなの輪から抜けるのは寂しいらしいの。」

言われてみれば、彼らはそういったところがあるかもしれない。だが、それは弱さなのだろうか、とミヤマは思う。

「だからさ、腕が立つのはいいけど、その分、えーっと、」

また言葉がまとまらなくなってフルートが首を傾げる。ハチスは既に言語化済みのようだった。

「行き過ぎると、日常で生きづらくなるんだよ、ミヤマ。」

ミヤマは分かったような分からないような、といった風情。フルートがさらに説明しようとするが、どうも上手く説明できないように、結局はハチスが代弁している。

確かに、彼らは浮世離れしているところがある。目の前にいるのに、どこか遠いと感じてしまう瞬間があるのだ。そう思ってしまったことが、申し訳無い。

しかし、そういった一切聞いた上でも、ミヤマはもっと強くなりたかった。脳裏に、一人の少女が浮かぶ。

「分かった。だけど、俺はやっぱりまだ強くなりたい。」

姿勢をただして、三人を正面から見据えて言う。決して遠くなどない、目の前にいる彼らを見て。

エリーは、ミヤマを見やり、珍しく柔らかく微笑んだ。

「大将、いい顔つきね。」

「エリー、話をそらさないでくれ。俺は真剣に……。」

ずっとエリーは立ち上がる。無駄を省き、素早く攻撃に移れる、流れるような動きだった。

「わかってるわ。でも、本当に強くなりたいなら、私たちには荷が重すぎるわね。ミナヅキとヤヨイ、そしてうちの旦那が相手をした方がいいわ。となると、他のみんなの指導は私たちがやることになるのかしら。」

ハチスは仕方ないなあと言いたげな表情を浮かべ、フルートは不満そうだ。しかし、三人とも反対意見を言う様子はない。

「意外だな。」

その場で屈伸を始めたハチスも、立って大きな伸びをしたフルートも、驚くほど行動が早い。

「僕たちが反対しないことが？」

「もう少し渋られるかと思った。」

エリーはもう既に、他の革命軍の者の訓練をみていた三人を呼びに行っている。ミヤマも立ち上がり、身体を解す。未だに全身に疲労が残っているが、先程のように動けないわけではない。

「だってさ、ミヤマ、さつき誰かを想って言ってたから。」

「はあ？」

確かに脳裏に大切な人を思い浮かべて言った。そして、それを読まれているのも今さら追求する気にはならない。だが、それと涉らなかったことがどう繋がるのか分からない。

「ミヤマに想ってる人がいるなら、そう弱くもならないかな、なんて僕は思っただよね。」

「どっという意味だ？」

「戻りたい日常があるなら、そこから遠ざからないだろ。あたしたちは、たぶん、そういうのなかったからさ、だから、なんか遠くなっただと思うし。」

フルートの説明ではよく分からなかったが、ハチスはいつものように解説する気はないらしい。

「それに、大事な女の子のために強くなりたいって気持ちを否定するほど、野暮じゃないからね。」

そう言い残し、ミヤマに背を向け、ミナヅキ達三人の代わりに指導に行った。

ふと、三人を連れてきたエリーがミヤマに訊ねた。

「ねえ、大將が革命を起こそうって思い立ったのはどんな理由からなのかしら。一応、革命軍のメンバーでも、言い出しっぺは大將だって聞くし。大將の理由はある意味この革命の始まりでしょう？ 少し興味があるの。」

ヤヨイはミヤマをどう指導したものと観察しているし、ミナツキとゴロウザエモンは無造作に立っている。どうやら、おおまかな指導方針はヤヨイ任せなようだ。

エリーの質問に答えかねていると、いつもの意地の悪い笑みを浮かべた。

「大將が革命を起こしてまで守りたい女の子に、今度会わせてちょうだいね。」

なにか言い返す間もなく、エリーは他のみんなの指導をしに去っていった。

7・第二王妃シャルロッテとの密会

高級な料理店。

ソースと果実に彩られたケーキが乗った皿を給仕人が運んでくる。微細な模様が編み込まれたテーブルクロスの上に静かに置かれたそれは、甘く食欲をそそる香りを放つ。

蝋燭の火が揺らめき、そう明るくない店内にある程度の視野を提供していた。

「それで、キュピレアナのお嬢さん。どのようなご用件でしょうか。」

テーブルを囲むのは二人の女。

一人はまだ年若い娘で、もう一人は全身に高貴な気配をまとった女性。絹のごとき滑らかな金髪を優雅になびかせ、上品に微笑む女性と比べると、娘の方はあまりにも貧相で素朴な姿をしていた。衣服においてもそれは当て嵌まる。女性の着ているドレスには細かな意匠が一流の職人の手によって施され、髪や首元の装飾品には大粒の宝石がその美しさを最大限に披露できるよう加工されている。そしてそれらが女性をより濃艶に見せる。娘の最低限相手に礼を失しない程度の衣装とは雲泥の差だった。しかし、その違いは決して娘側の問題ではなく、単に女性が高貴でありすぎるというだけなのだが。

その二人の後ろに、一人ずつ使用人が使えている。娘の方には彼女と同年代の侍女が、女性の方にはやはり主と同年代の執事が静かに直立していた。

女性の問いかけに娘は淡々とした口調で応える。

「今回お呼びしたのは革命についてです。シャルロッテ様ならご存じだとは思いますが……。」

「ああ、今はシャルで構いません。王都にいるはずの第二王妃シャルロッテではなく、嗜好きの三流貴族のシャル、ということをお願いいただけますか。」

「わかりました。」

「それと。」

シャルが言葉を切り、妖艶な笑みを浮かべる。娘は静かに続きを待つ。シャルが空になった自分のティーカップを見つめると、後ろの執事が滑らかな動作で注ぐ。彼女は琥珀色の紅茶で唇を湿らせた。

「随分、凜々しいですね、お嬢様。思わずこちらが気後れしそうです。私が以前お会いした時はもっと大人しい方だったと思うのですけれど……、ねえ、ハチ？」

執事は頭を垂れ、告げる。

「なにかしら心境の変化があったものとお見受けします。」

「キュピレアナ家のお嬢様は思うことがあるのでしょうかね。」

気品のある動きで紅茶を飲むシャルは、気後れしているようにはとても見えないが、そういうことにすべきなのだろう。むしろ娘が気後れせずこのままで良いという、シャルからの気配りなのかもしれない。実際、この娘は由緒正しいキュピレアナ家のご令嬢であり、

成金ではあるが非常に財力のあるシロガネ家の嫡男の婚約者だ。基本的に面と向かって会話する際に気後れする必要がある人間はそう多くない。たとえば、この今眼前にいる女性、王国の第二王妃シャルロッテのような、権力・財力・知力を兼ね備えた人間でなければ。

娘は短く息を吸い、凜として正面を見据えた。

「では、単刀直入に。革命軍が街の貴族を滅ぼしたら当然王家が鎮圧するはずでしょう。その鎮圧の際、死者を一人も出さずに、ある程度革命軍の要求を呑んでいただきたいのです。」

「ある程度、とはどの程度のことでしょうか。」

シャルは笑みを崩しはしない。けれど、その瞳が鋭い光を帯びたことも隠さなかった。娘は僅かに身をひきかけたが、あえて前に身体を押し出す。

「……………では、具体的に決めてしましましょう。そうですね、市民に自治権を認め、貴族はあくまでも飾り、決定権は市民によって構成される議会にのみ存在する、といったところでどうでしょうか。」

「そうですね、政治嫌いの貴族ならばそんな街の領主も引き受けてくれるでしょう。何人か心当たりはないこともありません。ただ、こちらのメリットは？」

娘はぐつと身体に力を入れる。表に出さないようにしているのだろうが、緊張しているのは傍から見ても明らかだった。

「貴方は横暴なシロガネ家を快く思っていないません。同じように、

自在に動き回り策を張り巡らせている貴方を、シロガネ家も快く思っていない。今はまだ新参者の成金貴族シロガネ家は、貴族の社交界においてたいした発言力を持つてはいません。ですが、来月にはシロガネ家の嫡男がキュピレアナ家の娘である私と結婚します。そうなれば発言力を増したシロガネ家が、立場もわきまえず各地を歩き回る第二王妃様を一気に責め立てるでしょう。この機会を逃し際、一番動きにくくなり困るのは貴方では？」

「他には何かありますか？」

シャルはその程度じゃ足りないと言外に訴える。無論、娘が用意したカードはこれで終わりではない。

「ついでに古くから王家との関係が良好とは言えなかったキュピレアナ家も同時につぶせます。一石二鳥です。」

「まだ足りませんね。」

「革命軍には見事な人材が揃っていると聞きました。人脈としてはなかなか魅力的かと。きちんと紹介はしておきましょう。」

「そうですねえ……………」

シャルが目をそらし、しばし考え込む。娘の方は内心気がないが、打てる手は打ち尽くした。手持ちぶさにケーキを眺めていた。

「あら、そういえば、革命の際、貴方はどうするのでしょうか？
革命軍にツテでもあるのですか？」

娘の回答は短かった。

「いえ、少しでも派手に処刑されようかと思っています。」

さすがのシャルも目を丸くして、驚きを隠せない。

「それはまた、どうして？」

「生き残る必要がありませんから。」

理由になっていない娘の回答に、シャルは沈黙で先を促した。

「我がキュピレアナ家は民を守ろうと税を軽くし、政治に私財を注ぎ、その結果多額の借金を負い、領地をシロガネ家に売った大馬鹿貴族。本末転倒な行動をしても尚、借金は返しきれず、由緒ある我が血統の娘を差し出す代わりに成金貴族から金銭的援助を受ける、哀れな脳なし共。そもそも、私が生き残ったらキュピレアナ家の再興ができてしまい、貴方との取引が成り立ちません。それに、革命軍のリーダーにこの条件を吞ませるため、私の命を一切の抵抗なく捧げ、誠意を示すくらいのことには必要でしょう。ついでに、精々少しでも派手に殺されて、一般市民に全ての貴族が幸福というわけではないと言うことと、剣以外でも革命くらいできることを伝えようかと。」

その決心は昨日今日したものではないのだろう。若い娘が一片の迷いもなく凜然と言い切る姿には、シャルですら圧倒される何かがある。

シャルは今までキュピレアナ家をかなり見下していた。代々銀山の街を領地とし、民に好かれる良い領主ではあった。しかし、どう

にも人が良すぎて、たびたび傾き掛けては王家に援助を求める。王家とて無限に金があるわけではないのだから、度が過ぎれば迷惑極まりないのだ。そしてこの娘の父親は特に酷かった。政治をするからには二人の人間を助けるために一人を見捨てる必要もある。それにも関わらず、彼は目に映る全ての者を手当たり次第救おうとした。その結果、桁外れの借金を背負い、名高きキュピレアナ家は瞬く間に転落していった。最後の苦肉の策が、領地をシロガネ家に売り渡し、娘をシロガネ家の跡継ぎの許嫁にすることだった。

しかし、眼前の少女には、彼女の父親にはなかった明確な一つの目的があるようだった。

「とても、面白い……、いえ、興味深い理由ですね。………ええ、分かりました。その条件で取引をしましょう。確認します。貴方は本当に生き残るつもりはないのですね？」

「もはや一切ありません。意志だけでなく、未練も。」

「では、貴族の処刑が終わった後に私が訪れて、その時点で貴方が生きていたら、私は通常通りの鎮圧の命令を出してもいいのですか？」

「構いません。そのようなことは決して起こらないと断言できます。」

いつそ、勇ましいほどに断言する少女。
シャルは感嘆と口惜しさの入り混じった溜息をつく。

「残念です。貴方のような方が領主だったのなら、あの街もこんなことにはならなかったでしょうに。」

「……………それは、ありがとうございます。」

やや重くなった空気を和らげようと、シャルはケーキを口に運ぶ。口内に広がる甘みに綻ばせたその表情は、純粹に可愛らしい。

「あら、とても美味しいですよ、このケーキ。」

娘の口にもあつたのだろう、彼女も愛嬌のある笑顔を見せた。二人して楽しそうにケーキを食べている様子は、庶民の親子の団欒とそう大差はない。

「強すぎない甘みが、この紅茶にとてもよく合いますね。」

「本当ですね。他にも美味しい洋菓子はあるのかしら。」

「『シャル』様、こちらに。」

「あら、ハチ、ありがとう。」

ハチというらしい執事が出した洋菓子に、また二人して舌鼓を打つ。

「そちらの執事さんは手際がいいですね。」

「貴方の侍女も可愛らしくて素敵ですよ。やっぱり男には分からないこともあるでしょう？　そういう時に私も侍女が欲しくなつて。たまに侍女を連れることもあるんですけど、そうするとハチが焼き餅を焼くんですもの。」

「いいじゃないですか。使用人と仲がいいのは。あ、このクッキーも美味しいです。木苺の酸味がきいていて。」

「あら、本当。旦那のお土産にしようかしら。ああ、でも彼は甘いものが嫌いでしたね。」

「では、私達で食べてしましましょうか。みんなで分け合って食べるのも美味しいですけど、独り占め、この場合は二人占めですね、時としてそれもなかなか魅力的では？」

「ふふふ、そうですね。二人の秘密、というのも素敵です。」

ほんの少し前までは互いの腹を探り合っていた女二人。今では仲良く菓子を分け合い、少女のするような他愛のない談笑している。話の内容は菓子から、やがて旦那と婚約者への不満へと飛び、理想の異性の話になり、生まれ変わるのなら何になりたいかを語り合い、どうすれば食べ過ぎを防げるのか真剣に話し合う。自然とお互いにテーブルへと身を乗り出し、顔を近づけて囁くように言葉を交わす。

執事が二人のくすくす笑いに耳を傾けていたところ、同じくそれを聞いていた侍女と眼があった。視線だけで次の予定のつまった主達をどうやって席から立たせようか、作戦を立てる。いつになく楽しそうなので気が乗らないが、時間ばかりは待ってくれない。執事は憂鬱そうに懷中時計を見やった。

8・優しい子守唄を聞いた夜

仕事と訓練とで疲れ切った体を引きずりながら、なんとかヨナは家にたどりついた。意識が何だか遠く、ひとまずソファに腰かける。少しだけ休んでから、夕飯を作って食べて、身体を拭いて、そして自室で就寝、と頭の中で予定をたてる。

身体が鉛のように重く、なんとなく横になる。瞬間、身体がソファに沈み込んでいく感覚がした。自室の寝台までの距離があまりにも遠く、結局諦めて居間のソファで妥協した自分は意志が弱いのかもしれない。空腹と眠気と、そして圧倒的な倦怠感が全身を包む。

ジユリが来ないからか、最近は本当に体力の限界まで訓練をしてしまふ。あまりよくないとは分かっているのだが、剣を振っている間は余計なことを考えなくて済む。それが心地よくてついつい気絶寸前まで剣をふるっている。

外の裏路地から、明るい楽しい声がした。軽く酔っぱらった男たちが、馬鹿みたいに笑っている。部屋に一人、ソファの上でぐったりとのびている自分の現状を思い出し、なんだかふと、寂しさを覚えた。くるる……と腹の虫の声が響いた。

食事は近所の食堂でもとってければ良かったかもしれない。今更そんなことを思う。作るのは億劫だし、朝になにか詰め込んで家を出ることにして、少しだけ、眠ることした。

「ただいまぁー、……………って、なにやってんの！？ ヨナ、どうしたの、体調悪いの？」

ジュリの声がする。けれど、彼女が帰ってくるのはもう何日か先のはずだ。夢かもしれないと思いつつ、重いまぶたをなんとか押し上げる。

目の前にジュリの顔があった。

予想以上に近くて、まつげが長いことや、こげ茶色の目が丸くて綺麗なことや、唇が赤くてふっくらしていることなど、彼女の顔が微に入り細にいり観察できてしまう。ソファの横にしゃがみこみ、俯きながらそこはかとなく上目遣いで心配そうな表情を浮かべている。ジュリの明るい栗色の髪が垂れて、ヨナの手にかかっていた。さらさらしていそうな触り心地が手の甲にうつすらと感じられる。なんだか柔らかな甘い匂いが鼻腔をくすぐった。

必死で平静を装ったが、顔が赤くなるのは隠しきれなかったらしい。ジュリも少しだけ頬を染め、身を引いた。

こほんと咳払いをして、もう一度訊いてくる。

「え、つと。体調、悪い？」

安心と名残惜しさとでいっぱいになりつつも、なんとか返事をする。口から出たのは、いつもよりも低くてしわがれた声だった。

「……あー、うん、死んではいないから大丈夫。」

「そんなの知ってるよ。風邪でもひいたの？」

「ん、ちょっと疲れた。」

問題ないことを示そうと起き上がると、酷使すぎた体中の筋肉やら関節やらが途端に悲鳴を上げる。思わず、顔をしかめた。その

せいで余計にジュリを心配させてしまったらしい。彼女の表情がさらに真剣になる。そつと支えるように肩に触れられた。それすら筋肉痛に響いたが、一瞬歯を食いしばりなんとか表にはその痛みは出さなかった。彼女の手は小さくてやわらかくて、少しだけ冷たい。筋肉痛こそ痛い、ずつとそうしてほしかったくらいだ。

「どつか痛い？ 怪我してもたの？」

「いや、平気だけど……。」

どう話そうか考えながら、言葉を濁していると、ジュリはヨナの肩から手を離し、額にあてた。そして、深刻な顔をする。

「熱あるよ。顔色すごく悪いし。その声聞くと、たぶん喉も痛いでしょう？」

確かにジュリの手は冷たかった。それは逆で、ヨナの体温が高かったのだろう。

ふと、窓の外を見ると、真っ暗だった。帰ってきた頃はまだ近所の家の灯りのほとんどがついていたが、今はもう寝静まっている。少しのつもりが結構寝入ってしまったらしい。

ジュリは立ち上がり、台所へ向かう。

「理由とか聞きたいけど……話したくないならいいよ、訊かない。だけど、こんなところじゃなくてちゃんと部屋で寝なよ。どうせ夕飯も食べてないでしょ。何か作るっか？」

大人しく彼女に従って部屋に向かおうとした。ただ立ち上がるこ

とすら億劫で、正直階段なんて登れる気がしない。全身がけだるく、熱があることが分かるとさつき以上の倦怠感がある。ジュリが台所に立ってばたたと料理している間、ずっとソファに横たわっているのは別に逆らおうという意思の表れではない。それはジュリには言わなくても分かったらしく、特に何も言わずに温かいスープを持ってきた。

「そんなに辛いのか？ お医者様呼ぼうか？」

「いや、いいよ。一応怪我は魔法で多少治してもらったし。本当に疲れてるだけだから。」

「そう？ それならいいけど……。」

そうは言ったものの、やはり熱があるのが心配なのだろう。ジュリは氣遣わしげな様子だ。落ち着きなく姿勢を変えている。

ジュリからスープの入った皿を受け取り、口に含む。薄い味で刺激が少なく飲みやすい。なんだかほっとするような味をしていた。こくりこくりと、スープを飲むヨナを、ジュリは沈んだ表情で見守っている。

やがて、ヨナがほとんどスープを飲み干した頃、ジュリは言いにくそうに口を開いた。

「どっちでこんなに働いたのか？ 仕事の方？ 革命軍の方？」

やや踏み込んだ質問に答えるか否か悩まなかったわけではない。けれど、ほとんど間は開かなかった。もう少し前ならだんまりを決め込んだかもしれない。それはヨナ自身の気持ちの変化からなのか、

ジユリとの距離感の変化からなのかは、ヨナには分からない。

「ん、や、革命軍の方、かな。」

ヨナが答えたことに、少し意外そうな顔をしつつ、ジユリはさらに質問を重ねた。

「ヨナってさ。本当に偉くないの？ 剣得意なんじゃなかったっけ？ 強い人って、偉いんじゃないの？ 偉いから、こんなになるまで働かなきゃいけないくらい、仕事がいっぱいあったとかじゃないの？」

一気に踏み込んだ質問に、ヨナは面食らう。最近、距離感が揺らいでいる気がする。近づこうとしているのか、遠ざかるうとしているのかは分からない。突然こうして今まであえて遠ざけていた話が出たりする。

それでも、そんな質問にすら、どう答えるか考える以上の時間があくことはなかった。

「んー、前も言ったけど、偉いつてことはない。剣は程々かな。その辺の人には負けないつもりだけど、まだまだ上には上がいるし。目指すところは遙か遠く雲の上で、見えないくらいだ。」

「じゃあ、どうしてそんなになるまで働いたの？」

「いや、仕事ってわけじゃないよ。単に稽古つけてもらい過ぎただけ。なんか、自分より強い人との組み手だと、ついやり過ぎちゃうんだよね、俺。」

「あー、一つのことにとこまでも貪欲になる人っているよね。私は途中で嫌気がさして放棄しちゃう人だから、そういう意欲はすごいと思うな。」

「強くないと殺されるつてのと、俺を育ててくれた傭兵団の団長に憧れてるから。あの人をいつか超えたいんだよ。」

「ヨナは頑張り屋さんだねー。でも、頑張りすぎたらダメだよ。」

ジュリがようやく笑顔を浮かべた。ヨナはほつとして、微笑み返す。やっぱり、不安そうな顔よりも笑っている方がいい。もちろん、彼女を不安にさせた責任がヨナにあることは自覚しているし、反省もしているが。

「そういえばさ、ジュリが帰ってくるのもう少し先じゃなかったっけ？」

これは彼女が来てすぐ不思議に思ったことだ。実際、ジュリは二週間来ないと思っていたからこそ、こんな醜態をさらしていたのだ。彼女が来るかもしれないなかった今までは、ここまで無茶な訓練をしたことはない。さすがにヨナにだって見栄や意地はある。

純粹な疑問だったのだが、それはジュリの琴線に触れたらしい。穏やかなだったジュリの表情が明らかに不満そうになった。

「……………うん、単純に用事が予定よりも早く済んだからだよ。理由はそれだけ。早く帰ってきたら迷惑だった？」

「あ、そういう意図はなかった、ごめん、怒ってる？」

「……………まあ、いいけど。」

どんな用事がどう早く済んだのかは訊かない。ジュリが自分から話していないのだから、いつも通りなら十中八九、訊いても答えはしないだろう。それに、答えてもらえてしまったら、逆にヨナの方が困ってしまいそうな予感もしたから。今日のジュリは一気に踏み込んでいたから、答えないと分からない。

「まったく、私がない間毎日こんな無理してたわけ？」

「毎日ではないけど、結構ね。さすがに熱出たのは初めてだけど。」

ジュリは呆れたように溜息をつく。当然の反応だ。自分の体調管理はできているつもりだけれど、精神的に不安定だったのかもしれない。ジュリがいないと、意識して気を緩める瞬間が存在しないから。

素直にそう言うと、彼女は黙り込んでしまった。空になった皿をひたたくり、簡単に洗う。その後ろ姿を見つつ、ヨナはまた怒らせたのかもしれないと気が気ではなかった。

けれど、単に照れ隠しだったらしく、皿を片付けたジュリはむしろさつき以上に柔らかな声をしていた。

「どうする？ 今日はそので寝る？ 上まで運ぶなんてこと出来ないけど、肩くらいなら貸すよ？」

ジュリはそう申し出てくれたが、あの華奢な肩に自分の体重を預けるなんて、怖いやら申し訳ないやらで到底できそうにない。それに、熱があるせいか、若干理性が緩んでいる節もある。他の誰かならまだしも、今ジュリの肩に密着して二階の寝室に向かったら、なにもしないでいられるか、あまり自信はない。

代わりに部屋から毛布を取ってくるよう頼む。とんとんと彼女が階段を登る軽い音に、ああ、ジュリが帰ってきたのだとしみじみと思う。ふわりと毛布を掛け、ソファの隣まで引っ張ってきた椅子に座り、ジュリはヨナの額に水で濡らした布を置いた。

「なんかさ。」

「ん、なに？」

「お母さんって、こんな感じなのかな。」

ヨナは母を知らない。物心がついたときには傭兵団に拾われていた。風邪で寝込んだとき、団長がやたらと面倒を見てくれたが、逆に鬱陶しくて追っ払った記憶がある。けれど、独り暮らしで病気になる、熱や頭痛などの症状より、心細さが辛いと気づいた。母を知らないヨナだが、幼いときは傭兵団の騒がしさにいつも包まれていて、寂しさを覚えたことはなかった。両親がいないことすら、当たり前のように受け入れられたのは、その賑やかさの中で孤独を感じるものがなかったからだと今になって思う。

「なに、急に。私はまだ子供じゃないよー。」

「いや、なんか……、ジュリが来るまで、ここで寝ててさ。熱があるとは思ってなかったんだけど、やっぱりだるくて、なんだろう、急に心細いって言うか寂しいって言うか。そんな風に、思ってたさ。」

ジュリはしばらく黙りこみ、そしてヨナの手を握った。驚いてヨナがジュリを見上げると、照れたように微笑む。

「これなら、もう心細くないでしょ？」

ジュリが隣にいてくれるだけで、もう心細くなってる。でも、手を繋ぐと優しい勇気が湧く。ジュリの手はヨナの手より一回り以上も小さくて、強く握ったら壊してしまいそうなくらいに華奢だ。そんな手を握ると、明日頑張るための力が出る。

ジュリの言葉には答えず、指を絡める。彼女は嫌がることなく、軽く握り返してきた。体調不良とは違う熱にうなされそうで、そうなる前に寝てしまおうと毛布に顔を埋める。

小さく、ジュリが子守唄を歌い始めた。歌詞が上手く聞き取れないくらいの声量で、穏やかな旋律が流れていく。優しい声だと、ヨナは思う。そして、その子守唄が終わる前に、ヨナの意識は眠りのなかに沈んでいった。

明け方、まどろみの中でジュリの手が額に触れた気がした。小さくもう大丈夫だねという声がして、そろそろ帰らなきゃ、と言われた。自分はどんな返事をしたのだろう。よく覚えていなかった。ただ、ジュリの声がひどく優しく聞こえたことが印象に残っていた。

9・婚約者の訪問

領主の子息の結婚式まであと二ヶ月を切ったある夜。

一人の青年がシロガネ家の一室の扉を叩いた。

しばらく息を殺したような静けさが室内から伝わってくる。

「ジュリエラ。いるんだろう？」

青年が婚約者の名を呼ぶと、また、居心地の悪い沈黙が返ってくる。青年は美しい銀色の髪を苛立ち紛れに掻く。再度ノックをして扉の前で待つ。

やがて、扉が開いたかと思えば、そこにいたのはジュリエラが気に入っている侍女だった。

「ギンロ様、申し訳ありませんが、お嬢様は既に夜着をお召して、寢台の中におります。お急ぎのご用事でしたら、私がお嬢様にお伝えいたしますが？」

夜と言っても、まだ日が落ちて数時間しか経っていない。ギンロはジュリエラの早すぎる就寝に違和感を覚えたが、追求することもまた面倒だった。どうせ、この侍女はジュリエラの味方だ。この嘘を問い詰めても、そう簡単に真実を言ったりはしないだろう。

ギンロは軽く首を振った。

「いや、大丈夫だ、明日にでもまた来よう。いい夢を、とだけ言うておいてくれ。」

「かしこまりました。」

その侍女は内心さつさと追い払いたくて仕方なかったのだろうが、少なくとも表面上は従順に頭を下げた。ギンロは一瞥すらせずに背を向け、自室へと足を向ける。

彼の婚約者は距離感のつかめない、扱いづらい女だと思う。しかしながら、成り上がりのシロガネ家には、由緒ある血統の娘との結婚は必要不可欠である。面倒ではあるが、仕事と割りきって結婚し夫婦となり、子を成すしかないのだろう。彼女も親の借金のためにこんな成金に嫁がされて憐れではある。だが、貴族の子女であればそれは必然と言ってもいいことだ。幼いときから恋愛など出来ないものだと諦めているだろう。それならば、もう少し相互理解のために話し合おうとしたっていいはずだ。ギンロはそう思う。なんにせよ、面倒くさい妻を持つことになりそうだ。

侍女はギンロの姿が廊下の角を曲がり、見えなくなるまで扉を守るように立っていた。

ロゼが主人の部屋に戻ると、ジュリエラは身体を強張らせて寝台の上に座っていた。枕をきつく抱きしめ、わずかに震えてすらいる。

度々夜にジュリエラの私室に訪れるギンロは、決して挙式前に彼女をどうこうしようとは思っていないだろう。それくらいはジュリエラもロゼも分かっている。そもそも彼はジュリエラに対してさほど興味も好意も持っていない。単に政略結婚であるために、周囲に仲の良さをアピールしているだけのつもりなのだろう。成金とはいえ豪商であるシロガネ家の嫡男はあまり予定にゆとりがあるわけではない。仕事を終えて、様子を見に来るとこういう時間になってしまうのだと思われる。

ジュリエラもそれは分かっているのだ。彼は少し時間が空けば、婚約者の人柄を知ろうと、少しでも結婚前に互いのことを分かり合

おうと、彼女の元に訪れている。それは夜に限定したことではない。日中の忙しさから夜の来訪が多いだけだ。

「お嬢様、大丈夫ですよ。ギン口様はお帰りになられました。」

ロゼが優しく主人の背を撫で、報告する。ジュリエラはこくこくと頷く。しかし、身体の震えは止まらない。乱れた呼吸の音が聞こえた。

どうしてこんなことになっているかと言えば、それにはまた、ロゼからすれば非常に腹立たしい貴族社会らしい事件があったからだ。ジュリエラの幼い頃の婚約者は、ギン口ではなかった。

その婚約者は非常に酒癖の悪い男だった。悪酔いした彼がまだ幼かったジュリエラに、婚約者だからと詰め寄った。深夜に体格のいい男が寝室へとやってきて、寝台へと押さえつけられ、酒臭い息があたり、下卑た言葉を耳元で囁かれた。必死の抵抗も空しくあわやというところで、使用人がやってきてなんとか止めに入った。

結局何事もなかったとはいえ、幼いジュリエラが心に受けた傷の大きさは計り知れない。そして、決してその行動が原因で婚約破棄されたわけではないのだ。キュピレアナ家から遺憾の意を示す書状を送り、相手の家から謝罪の文言が届いた。それだけである。今キュピレアナ家が没落していく様子に、その男の家からやんわりと断りが入った。その所業に、ロゼはこれだから貴族は、と何度も言っていた。

そして、今のキュピレアナ家はシロガネ家との婚約を破棄されるわけにはいかない。ジュリエラがどれだけ嫌な思いをしようとも、キュピレアナ家から何か言うことはあり得ない。遺憾の意すら示せないのである。ジュリエラがこんな状態になるにも関わらず、ギン

口の夜の訪問を止めるよう強く言えないのも、シロガネ家からの婚約破棄を恐れるキュピレア家の意向ゆえだ。

「ギン口さん、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………」。

乱れた呼吸の合間に、か細い声で何度も何度も謝罪を繰り返す。きつくつむった目尻には、涙がにじんでいた。

ロゼは、自身の服に縋りつく主人を見て、自分の無力さを呪う。背中を撫でることしかできない、自分にひどく腹が立つ。きつと、ジュリエラはロゼがそう思っていることを知れば、ロゼがそう思っていた事実になんて悲しそうな顔そして否定するのだろう。ロゼがいるだけでどれだけ助かっているか、いくらでも挙げてくれるのだろう。そんな優しい主人を、ロゼはとても慕っている。慕っているからこそ、何もできないことが悔しいのだった。

「……………お嬢様、今日はどうされますか？　こちらでお休みにならないようでしたら、外出なさってもいいですよ。」

ロゼは、未だ震えるジュリエラに問う。
けれど、ジュリエラは少し躊躇ってから首を横に振る。

ジュリエラは一時期、ギン口の夜の訪問に怯え不眠に悩まされていた時期があった。食欲もなくなり、目に見えてやつれていた。それでもジュリエラは家のために、毎晩訪れるギン口には身体の震えを隠して笑顔を見せて多少の会話をしていた。無理をして気丈に振る舞う彼女が痛ましく、ロゼはずっと齒がゆい思いをしていたのだ。だから、ジュリエラが思い付きのように呟いた脱走計画を強引に実行させてしまった。雨の日にあてもなく街をさまよい、風邪気味になったジュリエラが屋敷に帰ってきたとき、ロゼは泣いて謝罪した。

ところが、ジュリエラはとびきり素敵な人に拾われ、安心できる寝床を貸してもらったと言う。それから、数日おきに屋敷を抜け出し、その人のもとへ出掛ける日々が三年以上続いている。

ギンロはジュリエラが時折夜に不在なことに気付いているような雰囲気だが、特に何を言うでもない。帰ってきた翌日は、ジュリエラがいつもより明るいことにも気付いているからだろうか。シロガネ家の人間は、ジュリエラのことをただの血統を得るための道具としか見ていないが、ギンロだけは違うようなのだ。ジュリエラに興味はないが、多少は彼女の境遇を憐れんではいる、といったところか。

「今夜は、外出はなさらないのですね？」

「……………こんなところ、あの人に見せられないもの。きっと、すごく心配するのよ。だから、今日は行かないわ。」

ジュリエラはようやく落ち着いたようだ。表情は硬く顔色も悪いし、指先は冷えきっている。しかし、呼吸の乱れと震えは止まっていた。

「でしたら、お茶を淹れましょうか。このままでは眠れないでしょう？」

「……………ええ、熱いお茶をお願いします。」

きつと、今夜、ジュリエラは浅い睡眠をなんとかとれるかどうか、といったところだろう。ロゼはせめて主人が少しでも穏やかな気持ちになれるよう、慣れた手つきで茶の用意を始めた。

「ヨナなら、ホットミルクをいれてくれるのかな……………」

貴族の令嬢ではなく、ただの年頃の恋する少女らしい呟きは、口ゼは聞かなかったことにする。その言葉は、ジュリエラに安心できる寝床を提供できる唯一の人間への信頼と、その人を恋慕う想いが零れ落ちたもの。きっと、ジュリエラは口に出そうと思ったわけではないだろう。

口ゼは淹れたての茶を、主人のもとへと運んでいった。

10・侍女の想い人

深夜、ロゼはぎしぎしと音をたてる床を淡々と歩いていた。少しだけ埃っぽくて、汗臭い空気。酒の匂いもする。雑然とした室内では豪快な男たちの笑い声が聞こえた。

酒場よりも更に粗野な雰囲気漂うこの場所は、シロガネ家の私兵の詰め所だった。一応普段は街の治安維持をしており、自衛騎士団というのが公式な名称だが、傭兵が一時的に雇われているというのが現実であった。しかし、市民の中では悪名高いシロガネ家の私兵でありながら、自衛騎士団は市民から好意的に接されている。街の些細な問題に一切無関心な領主シロガネ家に代わり、自衛騎士団は団長を中心として市民生活の改善のため日夜働いているからだ。

「おお、姐さんがいらっしやったぞ！」

傭兵の一人がロゼの姿を見てそう叫ぶ。野太い歓声があがり、騒々しい歓迎を受けたロゼは曖昧に笑って奥の部屋の扉を開けた。素早く扉を閉めると、喧騒が少しだけ遠ざかった。やや散らかった部屋の中で書類と戦っていた人物に声をかける。

「ガルタ、来たわよ。」

「ああ、もう少しで片付くから待っててくれるか。」

がっしりとした体格の青年が静かな低い声が答えた。ロゼはかりかりとペンを走らせる大きな背中をぼんやりと見ていた。

彼の後ろで軽く結ばれた黒い髪が揺れる。真剣に書類の文字を追う切れ長の目も黒い。ひどく冷たい印象を与える容姿をしている上

に、落ち着いた低音で淡々とした口調の彼は、冷徹な人だと誤解されがちだ。けれど、実際はとても実直で不器用、そして優しいことをロゼは知っている。剣の扱いは人一倍上手いし、事務仕事のような普通の傭兵が嫌がることも黙々とこなす人だ。

この部屋は、自衛騎士団団長室である。実際はガルタの私室兼書斎であり仕事場といったところか。机だけでなく、寝台の上にも書類や資料が散らばっていた。枕元には騎士団の制服が几帳面に畳まれている。

やがて、一段落したのだろう、彼はくるりと椅子の向きを変え、ロゼと向かい合った。

「それで、どうかしたのか？」

「仕事ばかりして、全然休まないから、何とかしてくれて団員に呼ばれたの。休むように言い聞かせてくれて。」

ガルタには生来の生真面目な性格と、団長という肩書きから、頻繁に不眠不休で仕事をし始める悪い癖がある。今日も、目の下にくまを作り仕事をしていたようだ。

「ああ、この案件とあつちの許可証は早く何とかしないとイケないんだ。だから……………」

「いいから、休みなさいよ。」

声の疲れ具合から、ここ数日ともに睡眠をとっていないのだろうとロゼは推測する。強引にでも休ませなければ、彼は倒れるまで仕事をするだろう。ロゼは勝手に寝台の上の書類を机に移し、ガルタを手招きする。

「じゃあ、これだけ……………」

「いいから、いらっしやい。」

有無を言わせず、彼を呼ぶ。ガルタは若干躊躇い、しかし観念してロゼの左隣に座った。寝台がぎしりと音をたてる。

「お疲れ様。」

ガルタの鍛えぬかれた身体に抱き付き、ロゼは彼を労う。彼の左手でくしゃりと髪を撫でられ、目を細めた。

「ねえ、ガルタ。少し働きすぎよ。最近特に。ちゃんと休みをとらないとダメ。」

「そう言われてもな。最近妙に忙しいんだ。なんだか、誰かが意図的に処理しないといけない案件を作っているみたいな感じがするくらいに、な。」

やや猫っ毛気味なロゼの茶色の髪を、ガルタは丁寧に梳く。指の間をふわふわと柔らかな感触が滑っていく。そつと右腕でロゼを抱き寄せる。一切の抵抗なく、彼女はガルタの胸に収まった。

大人しく髪を撫でられながら、ロゼは呟くように言う。

「ねえ、ガルタ。」

「なんだ？」

「もしも、市民が革命を起こしたら、貴方はどうする？」

ふと、ガルタがロゼの髪を撫でるのをやめた。両腕でロゼを抱いて、しばらく黙り込む。

「……………なんだ、最近噂になっっている革命とやらを心配しているのか？」

ロゼは答えない。静かにガルタの胸に手をあてて、目を閉じた。

「そうだな。たぶん、自衛騎士団として鎮圧するんだろうな、俺は。」

「例えどれだけ多くの市民が決起しても？」

「ああ。革命とは言っても、所詮暴動の一種だ。暴動が起きたら、俺はそれを鎮圧する義務がある。」

「例え、鎮圧なんてできないほどの勢いだっとしても？」

「どれだけの勢いでも、俺は鎮圧しないといけない。出来るか否かじゃない。なにがなんでも止めさせるんだ。」

ぎゅっとロゼはガルタにしがみつく。自然と彼もロゼを抱く力を強くした。

「あたしが逃げてと言っても？ 貴方はただの金で雇われた傭兵でしかないの？」

「実際は俺は傭兵でしかないけれど、それでも心は自衛騎士団でもあるつもりだからな。だから、ロゼ、お前がなんと言おうと俺は自

分の任務を全うするよ。」

ずっとロゼは顔をあげ、ガルタに口付けた。

「全部分かって、それでも治安が乱れないように、身を粉にして働く貴方に、私は惚れたのね。」

ガルタはゆっくりとロゼの身体を寝台に倒す。彼女は潤んだ瞳で彼を見ていた。

「真面目で、融通が効かなくて、すごく優しい貴方が好き。」

深く口付けられ、ロゼは息を漏らす。

「すごく優しい、貴方が好き。」

ガルタの手がロゼの身体を抱きしめた。ロゼは泣きそうな表情で微笑む。

「あたしは、そんな貴方の恋人であることを、誇りに思うわ。」

ロゼが目を覚ますと、ガルタはもう机に向かっていた。ぼうつとその真っ直ぐに伸びた背中を見ていると、気配に気づいたのかガルタが振り向いた。

「ああ、おはよう。」

穏やかな笑顔を見せる彼に、ロゼはぎゅうっと胸を締め付けられる気がした。泣きそうになるのをなんとか堪えようとして、拳を握

る。

「ねえ、革命軍はすごく統制がとれてて、すごく強い。人数も多
くて、騎士団じゃ敵わない。それでも、ガルタの答えはやっぱ変
わらないのね。」

「ああ。俺は俺がやるべきことをするだけだ。」

そつとロゼの頭を撫でて、ガルタは言う。

「俺はこの騎士団が好きだし、とても大事なんだ。そして、ここは
街の治安を守るための組織。俺は、俺の大好きなこの組織のあり方
を、存在意義を否定したくない。」

ロゼは街で大きな喧嘩に巻き込まれたことがある。足を挫いてし
まって、目の前で殴り合う男達から程近いところで立てなくなっ
てしまった。男達はしゃがみこんでいるロゼには気付かずに乱闘を続
けていて、危うくもつと大きな怪我をするところで、ガルタがその
喧嘩を止めさせたのだった。とても鮮やかに剣の鞘で男達をねじ伏
せ、あっという間に他の騎士団員に引き渡して、ロゼに手を差し出
した。立てるか、と訊いてきた声は無愛想ではあったが優しくった。

ロゼは、自衛騎士団のガルタが好きだ。別に彼が自衛騎士団でな
かったとしても、好きになっただけだと思う。けれど、ロゼが好きに
なった彼は誰よりも愚直に自衛騎士団員であろうとする彼だった。

泣きそうでくしゃくしゃに歪んだ顔を見られなくて、ロゼは
ガルタの胸に頬擦りをする。ガルタはそれすら愛おしそうに、また
ロゼの頭を撫でた。

「俺は、何があってもロゼが好きになった自衛騎士団のガルタでいたい。それじゃあ、だめか。」

ロゼには首を振ることしか出来なかった。

どうして、あたしの大好きな人たちは、こんなにも高潔でそして美しいほどに残酷な決断をするのだらう、と思いながら。

11・月光に照らされて

ヨナは、どうしてこんなことになっているんだろうと、自室の扉を開けて途方に暮れていた。

目の前の寝台では、少し顔の赤いジュリがすやすやと可愛い寝息をたてている。いつもヨナの使っている毛布にくるまっところりと子猫のように丸くなり、昨日ヨナの寝ていた寝台のシーツを握って、幸せそうに、無防備な姿で、寝入っている。枕の上に広がる栗色の髪は窓から入る月光を浴びて艶やかに輝き、白くてやわらかそうな肌は暗い室内で淡く浮かび上がった。

ジュリと出会った日のようなどしや降りの雨がさつきまで降っていた。今では綺麗に晴れて、きらきらと窓から月光が差し込んでいる。

今日の夕食の席で、仕事帰りに同僚に渡された度数の低い果実酒をジュリと分け合った。ほんのりと酔いがまわったのか、ジュリはいつもよりもよく笑っていた気がする。そして、ジュリはいつもより早く自室に向かった。その足取りは危ないものだったはず。

では、どうしてそのジュリがヨナの寝台で寝ているのか。

きっと、たぶん、おそらく、酔っぱらって寝ぼけて部屋を間違えた、というのが理由だろう。

しかし、もしかしたら。

何らかの意図のある行動だったとしたら？

ジュリは確かに酔っぱらっていた。

頬がほんのりと赤みを差すくらいには。

だが、前後不覚はおろか、思考が曖昧になっている様子すらなかった。

果たして部屋を間違えるほど、しかも数年間使っているこの家で自室とヨナの部屋を間違えるほど、酔っぱらっていたのだろうか？

ヨナも若い青年、妄想じみているとは分かっているけど、この現状に何も思わずにはいられない。

決してヨナ自身も酒に強いわけではないが、今日呑んだ果実酒は非常に度数が低い。実際、同じような瓶を一本一気に飲み干して、こんなものは酒じゃないと言い放った仲間もいる。そして、今の今まで、ヨナは自分が酔っているだなんて一切考えもしなかった。

ふらりと、一歩部屋に入る。

自分の部屋だ、入ること自体は咎められるようなことではないはず。

「んっ……………」

室内に響いたジュリの声に、ヨナはびくりと硬直する。

息を押し殺し、自分の部屋に入ったただけだと自身に言い聞かせ、ジュリの寝姿から無理矢理目を逸らす。

けれど、視界の端に映る彼女は、蠱惑的なほどに美しい。その華奢な肢体が月光に照らされ、さながら月の女神のようである。少しだけ捲れた毛布の下に白い肌が覗いていた。

とっさに部屋を見回す。そして、普段ヨナの部屋には存在しないものを見つけた。

「ジュリの使用人服……………」

しわにならないよう、軽く椅子にかけられているそれは、この家に来るとき彼女が身に纏っている、見慣れた紺の使用人服。そしてそれが椅子にかけられているということは、今毛布にくるまっている彼女はほとんど何もまといないということだ。

そう理解した途端、自然と視線が彼女に引き寄せられる。

「ん……みゆう……………」

もぞもぞと寝返りを打ち、ジュリはまた気持ちよさそうに寝息をたてる。穏やかにその背中が上下するのがわかった。

ふうつと安堵の息を吐いて、力を抜く。

寝返りを打つ際の衣擦れの音が、まだ頭のなかで響いているような気がする。

どくんどくと自信の心音が耳障りだ。頭がくらくらはして、全身に怪しい熱が帯始める。

ゆっくりと寝台へと歩み寄る。

ヨナの目は、最早ジュリから逸らすことが出来ない。その寝姿を舐め回すように見つめてしまう。

向けられた背中の肩甲骨が、広がる髪に埋もれたうなじが、毛布からはみ出た踵が、暗い部屋で艶かしく月光に照らされる。

この美しい髪に触れたいと思った。

柔らかかそうな栗色の髪。

それを自身の指で優しく梳いてみたいと。

寝台の横に立ち、眠るジュリを見下ろす。理性が警告を発しているが、髪を軽く触れるだけならいいような気もする。ゆっくりと身を屈め、ジュリの髪に手を伸ばす。

「……よな……………」

まるで図ったようなタイミングで、舌足らずな声で名前を呼ばれ、ヨナが身を引く。けれど、ジュリは起きたわけではないらしく、また寝返りを打って、安らかな寝息をたて始めた。

ヨナの心臓は激しく脈打ち、身体が熱くなる。よくないとは分かりながらジュリの寝顔を見やった。

そして、ヨナは息を飲む。

彼女は、泣いていた。

決してうなされているわけではなく、その表情は少しだけ寝苦しそうなだけだ。なのに、彼女の閉じられた瞼からは、一本の並みだの筋が枕へと伸びている。

ヨナの身体から一気に熱が引いていった。ただ、ジュリが愛おしくて、大切にしたいくて、彼女を苦しめる全てから護りたかった。

そつと彼女の頭に手を伸ばす。さっきのように熱にうなされた感覚はなく、心のなかにはひどく穏やかに凪いでいた。

「ジュリ、泣かないで。」

彼女の頭を撫でる。優しく、壊れ物を扱うように。

「大丈夫、ジュリが怖がるものは、ここにはないから。」

少し前に自分が彼女を脅かす存在になりかけていたことは秘密だ。彼女が安心して眠れば、それでいい。

この安らかに眠れないお姫様を抱き締めるのは、彼女が本当に穏

やかな眠りを手にしてからでいい。

そつと、彼女の涙を拭う。この家に逃げてきてすら、彼女は泣きながらでないと寝れないことが、悔しかった。

「君が、安心して眠れる場所を作るから。頑張つて、俺が作るから。だから、もう少しだけ待っていてほしい。」

それは、ヨナにとっての誓いの言葉だ。こうして告げると、気恥ずかしさもある。けれど、相手は寝ているのだから、どうということはないのだけれど。

彼女の体を見ないようにしながら、ずれた毛布をかけ直してやる。ジユリは最初と同じように、穏やかな寝息をたてていた。

彼女が酔っぱらってヨナの寝台で寝ているのか、はたまたなにか意図があつてここで寝たのか、ヨナには分からない。けれど、意識してても無意識のうちにでも、この寝台を安心できる寝床として選んでくれたことが嬉しい。そして、そんな場所ですら彼女が泣かなければいけないことが悲しい。泣かないで眠れる寝床を提供できないことが、悔しい。

心の中の様々な思いを忘れないよう、胸に刻み込んで、ヨナはそつと部屋を出た。

今夜は、階下のソファで寝ればいい。

12・背負ったものの重さ

ものすごい速度で迫る拳を紙一重でかわし、ミヤマは相手との距離をとる。相手は素手、ミヤマは剣だ、距離さえとれば一方的に攻撃できる。僅かに後退したところに、鋭い蹴りが飛ぶ。それを回避するとさらに突きが、続けて踵落としが放たれ、呆気なくミヤマはその場に沈没させられた。

「おい、リーダー、まだ沈むには早いだろ。さつさと立って。」

絶妙な力加減をされた。それはミヤマにも分かった。頭が瞬間くらくらするが、なんとか立ち上がる頃にはなんの不調もない。軽い疲労感、組手をしたのだから当然だが、それ以外は身体は完調なのが不自然だった。

訝しむようにミヤマが身体を動かすと、相手をしてくれていたミナヅキが焦れたように急かしてくる。

「リーダー、僕はそういう無駄な時間、嫌いなんだけど。」

「ああ、悪い。」

違和感を拭えないまま、再びミナヅキと向き合い、軽く構える。ミナヅキは自然体だが、どうにも隙がない。

ミヤマが攻めあぐねていると、ミナヅキは短く息を吐き、一気に接近してきた。軽い一撃を訓練用の剣でいなし、距離をとろうと一歩引く。ミナヅキはより強引に近づく。蹴りと拳の連打に、気圧されながらじりじりと後退り、背後からヤヨイに頭を蹴り飛ばされた。床に勢いよく叩きつけられて一瞬呼吸が止まり、立ち上がろうとし

て四つん這いの状態で激しく咳き込んだ。肺から無理矢理空気が押し出されたような感覚がした。ひどく目眩もする。世界がぐらぐらしていた。なんとか立とうともがいていると、ヤヨイがミヤマの横に来て、やんわりと言った。

「しばらく目眩が止まらなくなったので、そのままいいですよ。ただ、その間に何がいけなかったのか、考えておくことをお勧めします。」

漸く咳は落ち着いたが、彼女の宣言通り視界は好き勝手に回転したままだ。この状態で考えると言うのも結構無茶だとミヤマは思うが、ミナヅキとヤヨイに訓練を頼んだ時点で、無茶苦茶は想定していたから文句は言わない。この二人は若手の優秀な弟子を育てているらしく、人材育成も比較的得意分野だと言う。ならば、ミヤマにできることは、黙ってついて行くことだけだった。

例えば、何故今まで見守っていたヤヨイが、突然背後から攻撃を行ったのか。そこにはきつと意味がある。背後が隙だらけと言うことだろうか。いや、組手である以上、相手が目の前にいるときに背後を気にする必要はないように思う。だとすれば、後退したことが問題だったのだろうか。そう言えば、先程も後退したところでミナヅキに叩き伏せられた気がする。では、今回の問題点は後退するなと言うことだろうか。だが、剣と拳でやりあうならば、ある程度の距離をおくのが基本だ。どうにもその結論には違和感がある。

ぐるぐるとミヤマが考え込んでいると、ヤヨイがひとつだけヒントを出した。

「ミヤマさんはこの組手をなんのためにしているのでしょうか。」

「……………それはえっと、強くなるため？」

ヤヨイの視線が突き刺さる。しかし、言わないところを見ると、これ以上ヒントをくれる気は無いようだ。徐々に目眩がおさまるのを感じながら、ミヤマは周囲を見渡した。

ミナヅキといえば、こんな短時間の間にもう他の仲間の相手をして、搦じ伏せ、言葉を介さない指導を始めている。ヤヨイもあまり教えるということをしてないが、ミナヅキはさらに極端で何が悪いとかどうするといったとは決して言わない。ただ組手のなかでその人の欠点を気づかせるだけだ。本人が頭を捻り、正解とも言える改善があるとミナヅキは少しだけ隙を見せてくれる。無論、一瞬のことですぐに次の弱点を突かれるのだが。

今ミナヅキの指導を受けているのは、パン屋の息子だ。剣を持つだけでも、なんだか危なっかしく見える。基本的な動きを、そこはかとなくミナヅキ誘導しながら剣と拳を交えていた。砕け気味の青年の腰に、ミナヅキが綺麗な蹴りを入れた。それで青年も自身がおっかなびつくり剣を握っていたことに気づいたのだろう、なんとか姿勢を正そうとする。だが、今度は重心が上がってしまい、ミナヅキにすっ転ばされていた。

彼が剣を持つと不格好になるのは仕方がないとミヤマは思う。そもそもパン屋の息子など、一生のなかで剣を持つとは思っていなかっただろう。何事もなく普通に生きていれば、麵棒を武器として厨房で奮闘する毎日しか送らないはずだったのだから。革命を起こすためだけに、彼は握らなくても良かった剣を持っているのだ。

そして、ようやくミヤマは正解に辿り着く。ヤヨイに今度こそははっきりと答える。

「革命のため、だ。」

革命の最中は、乱戦になるだろう。一対一の戦いではないから、相手が目の前にいたとしても、背後に気を付けなければならぬのだ。特に後退するときには余計に気を配る必要がある。普段、大規模な乱戦はしてきていなかったため、その感覚が鈍っていた。仲間がだいたい一人ずつ敵を受け持ち、各個撃破するような盗賊との戦闘とは訳が違う。相手は熟練の貴族の私兵で、こちらは寄せ集めの市民だ。二人でやっと一人の相手をする者もいるだろう。もしかしたら、相手に仲間の加勢を許してしまうこともあるかもしれない。そんな中で、ある程度経験のあるミヤマは全体を見て、状況次第で複数を相手取る必要もあるのだ。後方不注意などもつての他。

それだけじゃない。実際の實力ではミナヅキやヤヨイに遠く及ばないとしても、ミヤマは革命軍のリーダーなのだ。ミヤマが防戦一方になったりすれば、それは全体の士気にも影響する。

さっきまでとは違う目眩がし始めた気がする。
自身の背負ったものの重さを、改めて感じる。
自然と溜め息が零れた。

「溜め息と言うのもあまり感心しません。指導者たるもの、常に胸を張り、堂々と君臨すべきです。」

さらなるダメ出しに、ミヤマは苦笑した。ヤヨイも本気で改善を進めているわけではないのだろう、やわらかく微笑み返す。

「まあ、そう簡単に直るものでもないでしょうね。」

「ああ、俺も時々、こんな面倒で重くて嫌な立場、投げたしたいと思ったりするよ。」

思わず零れた本音。ヤヨイの表情が強ばる。けれど、ミヤマはまた苦笑して、続けた。

「いや、思うだけだ。投げ出したいと思うけど、それ以上にやりたいことが、俺にはあるから。」

ゆっくりと言葉を吐き出す。その中に込められた思いは、ヤヨイには分らない。ただ、きつととも純粹で切実な思いがあるのだろうということは確か。そして、便利屋として勝手に調べた貴族の依頼主の素性と、ミヤマの素性から、誰に対する思いなのかも一応推測はできる。その思いの種類すら、予想がつく。けれど、そんな事実関係は誰かの感情を判断するひとつの基準でしかなく、その基準だけでは、彼を革命軍のリーダーにさせた思いは理解しきれやしないだろう。

ヤヨイは時間をかけて彼の言葉を咀嚼し、完全にはわからずとも、そこに秘められた気持ちを少しでも深く感じ取るうとした。

「……………以前、エリーさんがミヤマさん自身が選んだ茨の道だと仰っていました。本人が満足するまで突き進めばいい、とも。ですが、私はその時、貴方は多少なりとも周りに流されてその立場にいるのではないかと思っていました。」

そして、ヤヨイはミヤマを正面から見据えて、続ける。

「ですが、違うのですね。貴方の中には、確固とした意思があり、思いがあり、なしたいことがある。そして、その手段として、貴方は革命を選んだ。周りとは一切関係なく、貴方はひどく自分勝手にこれだけのことをしようとしているんですね。」

自分勝手。それは、ミヤマをとてめ的確に表現している。たくさ

んの市民を巻き込み、貴族や彼らに荷担する者の命を吹き飛ばし、
とんでもない争乱をこの街に引き起こそうとしている。全ては、ミ
ヤマ個人の勝手な願いを叶えるためだけに。

「そうだ。俺はすごく身勝手で、自己中心的で、ひどい人間だ。」

「その通りです。ですが、それは貴方だけじゃない。」

ヤヨイの断固とした口調に圧されなかったと言えば嘘になる。凜
と背筋を伸ばす彼女が眩しい。

「ここにいる人間は皆、各々の勝手な願いを叶えるためにここに
いるですよ。確かに、貴方が提案しなければ、彼らはこんなことを
しようとしなかったでしょう。けれど、貴方の計画に賛同しない道
もあった。にも拘らずここにいる時点で、革命の中に身を投じるの
は彼らはの選択によるものです。だから、貴方は最初に提案したと
言う責任以上のものを背負う必要はありません。」

言い方は厳しいが、これはヤヨイなりの励ましだろうか。どう受
け止めればいいのか。背負いすぎるなと言うことだろうか。

ミヤマがぼんやりと考え込んでいると、一見無造作に思えるけれ
どその実際のない足取りでミナヅキが戻ってきた。しかも、ゴロ
ウザエモンを引き連れてである。そして、ミヤマの首根っこをつか
み、強引に立たせた。

「ほら、いつまでもくっちゃべってないで、組手するよ。リーダー、
弱いんだから、くだらだら遊んでる場合じゃないでしょ。」

いつになく刺々しく喧嘩腰だ。ミヤマはなんでミナヅキがここま
でご機嫌斜めなのかわからず、ヤヨイの方を窺う。

「ミナヅキ、私がミヤマさんと話していたくらいのことです、嫉妬しないでください。」

「嫉妬してないっ!!」

それからの、ミナヅキとゴロウザエモンを同時に相手にすると言う組手はいつも以上に過酷だったことは、言うまでもない。

13 すこし昔にあったこと

食事を終えて、ソファに並んで思い思いのことをする。ジュリは何やら、最近一心不乱に刺繍をしている。ヨナはそれを眺めながら、手持無沙汰に剣を磨いていた。ジュリの手つきは手慣れたもので、黙々と針を進めている。俯いて作業をしているせいか、どこか物憂げにも見える彼女の隣で、ヨナもぼんやりと手を動かす。室内には気だるげな空気が漂っていたが、ジュリもヨナもそれを苦痛とは感じない。むしろ、初めて逢った雨の日のようで、ヨナは居心地の良さすら覚えていた。

「そういえば。」

ふとジュリが手を止め、顔をあげた。

「ん？」

「ヨナって、貴族嫌いななの？」

「え？ いや、嫌いだけど、あれ、言っただけ？」

ジュリの手が少しだけ震えて見えた気がした。理由が思い当たらないし、寒いのだろうかと首を傾げる。

「言われてないけど、この前、私が悩んだとき、貴族なんてーって、ヨナが珍しく熱くなってたなーって思っただけ。その時、ああ、ヨナは貴族嫌いなんだなーって思ったの。」

ジユリは答えて、また針を動かし始めた。外から聞こえる猫の鳴き声にぼんやりと耳を傾けて、ヨナは目を閉じる。ゆっくりと刺繍の針は進み、新しく羽の形を作った。

「……………昔、俺がいた傭兵団が壊滅したって話したっけ？」

なるべく、重く響かないように気を使ったつもりだ。軽く軽く、なんてことのないことに聞こえるように。けれど、ジユリは酷く申し訳なさそうな表情をする。

「ごめん、嫌なこと思い出させちゃった？　ヨナが話したくないなら別に言わなくて良いんだよ？」

「いや、どこまで話してたっけかなってだけだよ。俺はジユリもご存じの通り、傭兵団の団長に拾われて、育てられたんだ。産みの親は、知らない。たぶん、団長が拾ったらしい東の辺境の小さい町の人なんだろうけど。」

針仕事はピタリとやめて、じっとヨナを見つめながら聞き入っているジユリ。雑談の延長でも、決して切り替えを忘れない彼女の律儀さが、ヨナは好きだった。

「ほんと、粗野で乱暴でどうしようもない集団だったなあ。馬鹿ばっかりだしさ。みんな武器を持って戦場に立てばそりや向かうところ敵なしなんだけどさ。街じゃ微妙に嫌がられるような人たちだった。」

ヨナにとっての家族とは、あの傭兵団のことだ。目を閉じれば、酒場で馬鹿みたいに騒いでいる彼らの姿が鮮やかに浮かぶ。

「団長は結構な大男でさ、大剣をぶん回していた。大胆で何にも臆さなくて、いつも豪快に笑ってた。金銭感覚は大雑把だったなあ。酒屋で吹っ掛けられても気かないこともあったし。参謀に怒られて、それでも細かいこと気にするなって笑い飛ばしてたよ。その後、参謀が正座させてたけどね。貧乏傭兵团だったから。」

身体のかなんない団長が、比較的小柄な参謀に正座させられて、縮こまっていた光景は、面白おかしく思えた。大きくなって、参謀が団長に突きつけた赤まみれの出納帳を見たら、とてもじゃないが笑えなかったのだけれど。

「副団長は、長身の美女でね。出るとこは出てへこむとこはへこんでた。さばさばとした気っ風の良い姐御って感じかな。んで、お世辞にも顔の整っているとは言えない団長にぞっこんだったし、団長も彼女が好きだったから、みんな美女と野獣って笑ったなあ。普段は素っ気ないくせに、団長が呼べば犬みたいに跳んでいく。わりと淡泊だったけど、仲間に対する気遣いは誰よりも細やかだったよ。」

いくつもの求婚をすげなく断り続け、とても幸せそうな笑顔で団長に寄り添う美女。団長が他の女性を見ると、子供みたいに嫉妬した。団長のために苦手の料理の練習までやっていた。結局その努力が実ることはなかったのだが。

「突撃隊長の旦那は、槍の名手だったよ。いつもはなんも考えないで物言ってばっかで、とにかく槍が振るえればいいって豪語してた。それでも大きな問題ができると断トツで冷静な意見を言う人だった。考え事すると腹が減るから、嫌いなんだってさ。」

実際、彼は真面目な会議の後には、物凄い量をいに流し込んでいた。先陣をきって突き進む姿は、ヨナの脳裏に焼き付いている。敵陣に

限らず、食堂へも。

「参謀は眼鏡のひよろいにーちゃんでさ。モヤシってあだ名がついてたんだよ。頭のキレはピカイチで、ほんと、なんでそんなこと思いつくのかって言うような作戦をたくさん提案してた。前線とかじやなにもできないけど、あの人がいなかったら潜り抜けられなかった死線も一杯ある。経済観念もそうだしね。ただ、あの長いお説教だけは嫌だったなあ。」

眼鏡を何度も直しながら、延々と正座させられながらくどくどと怒られるのだ。足はしびれるし、口答えをすればさらに延長されるから、黙って聞くしかない。しかし、その長いこと長いこと。

「ヨナは、素敵な人たちに育てられたんだね。」

ジュリがぼつりと呟く。淡い微笑みを浮かべながら、意図せず零れたような言葉に、ヨナは胸の奥がじんと温かくなるのを感じた。傭兵なんて、決して一般的には好意的に見られるような人間じゃない。むしろ、嫌悪や忌々しげな眼差しばかりだった。他の人間が彼らをどう見ようと構わない。けれど、ジュリにだけは、ヨナを育ててくれた大切な血の繋がらない家族を、認めてほしかった。話す前に少し悩んだのは、ジュリがどんな風に受けとるかわからなかったから、ヨナとしてはなかなか覚悟が必要だったからだ。

「うん、そうだよ。すごく、良い人たちだった。」

良い人たちだった。面倒見がよくて、自分の信念は意地でも曲げなくて、情にあつい。驚くくらい人間味に溢れた、よくも悪くも素直な人たちだった。

「良い人たちだったからさ……。馬鹿が付くくらい良い人たちだったから、死んじゃったんだ。みんなね。」

そう繋がることくらい、ジユリも予想はしていたのだろう。けれど、聞いた瞬間、斬りつけられたような表情を見せる。ぎゅうつと拳を握りしめて、ヨナをじっと見つめて続きを促した。

「団長と懇意にしてる貴族からの依頼でさ、ちょっと不利な戦いをする事になったんだよ。辺境の横暴な貴族の粛清、っていうのかな。内容は、俺もまだ小さかったし、そうじゃなくても貴族の事情なんてよくわかんないしさ。詳しいことは全然覚えてもないんだけど。」

依頼主の貴族の、複雑な表情は忘れられない。そして、その姿から何かを悟り、死にたくない奴は今回は参加すると言った団長の言葉も。

「団長は、依頼を受けるときに気づいていたんだと思う。みんなに参加しなくても良いって言ったんだ。俺はついていきたいって言った。他に行く宛てもなかったし、まあ、うん、何か嫌な感じ、ってのはしたからさ。」

直感やら、虫の知らせなんてものではなく。ただ、みんなの表情だけから、不安を感じた。いつになく、重い空気をまとい、そして決意し、凜々しく戦場に向かっていった。

「けど、団長は俺はつれてってくれなかった。」

この家は参謀の家。長いこと空けていたため、来たときは埃だらけだった。けれど、しっかりした家で、そして時折参謀が幼かった

頃に残したらしい落書きがあるのも、ヨナは好きだった。突撃隊長は、今の仕事場に紹介状を書いてくれた。彼は、ヨナの育った傭兵団に入る前にも、様々な傭兵団に所属していたから顔は広かった。まだ小さいヨナの剣の腕は保証するから、身の回りのことはそれとなく面倒を見て欲しいと。副団長は、料理だの洗濯だの細々したことを教え、決して荒れた生活だけはしないようにと、耳にタコができるくらい言い聞かせた。そして団長は。

ヨナは手入れを終えた剣を、ぎゅうつと握る。

「それを……………」

「そう。それで、みんな俺が生きてけるような環境だけ整えて、戦場に行ったんだ。」

ひどく残酷だと思う。一人残されて、途方にくれて。他のヨナ以外は結局、一人も欠けることなく行ってしまった。

「えと、それはどんなお仕事だったの？」

「貴族にさ、捨て駒にされる仕事だった。」

隣のジュリが息を飲む。勢いを失わないうちに、ヨナは吐き出した。

「囹だよ。そもそも助けられる予定のない、囹。肅清対象の貴族の領地を少数で掻き乱して、その混乱に乗じて依頼主の兵が進軍する。表向きは、領地ないの平和を乱す逆賊を討つてことだね。相手貴族の兵が囹の討伐に夢中になっている隙に、貴族を肅清する。囹側に、援軍は来ない。万が一生き残っても、名目上は逆賊だから、殺

される。勿論、誰も生き残らなかったよ。」

ジュリの手がそつとヨナの手に触れた。そうされて始めて、自分の手がやたらと冷たく、震えていることに気づく。自分では納得してきちゃんと飲み下せていると思っていたけれど、まだまだ心の奥底でくすぶっているのかもしれない。ジュリの手の温かさを感じて、軽く深呼吸して続ける。

「団長は、依頼してきた貴族に恩があった。俺はよく知らないけど、傭兵団としても、団長個人としても、大きな借りがあったらしくてさ。なんていうのかな、普段は傭兵なんだけど、でも団長はその貴族に対しては騎士みたいなのがあったんだ。忠誠を誓ってるって言ってもいいくらいに見えた。」

団長が忠義立てする相手に、傭兵団の皆も何かしらは感じていた。そして、それ以上に、団長が向かう最期の戦場についていけないと言っ者などいなかった。

「まあ、そんなこんなで。生まれ育った傭兵団が、貴族に捨て駒にされて、あっさり壊滅。それが、本当にすごく呆気なくて、依頼してきた貴族は当たり前みたいな態度してて。幼心にはちよつときつくて、さ。」

「ヨナは、団長さんたちと一緒に行きかけたんだね。」

こくりと頷くと、ジュリはそつと、感傷に浸っているヨナの頭を撫でた。ぎよつとして顔をあげると、首を傾げる。

「ああ、ごめん、嫌だった?」

嫌ではない。嫌ではないのだけれど、それでもそれなりの意地もあるわけで、なかなか複雑だ。口を開きかけ、なんだか声が若干湿りそうな気がして、曖昧に横に首を振った。

「ヨナが、捨てられた子犬みたいな顔してるから。」

その評価は不本意だ。納得できない。反論しようと口を開きかけると、ジュリがぎゅっとヨナを抱き寄せた。

「でも、私は団長さんがヨナを連れて行かなかったことに感謝したい、かな。ヨナと一緒に行ってたら、私はヨナと出逢えなかったから。」

ジュリの体温は、先ほどの手とは違ってヨナよりも低いようだ。少しひんやりとした華奢な身体に、そつと答えるように手を回す。ジュリがことんとヨナの肩に頭を乗せた。

「俺、貴族は嫌いだ。」

「うん。」

「それに、ジュリを泣かせてるのだって貴族だろ？」

「……………うん。」

「だから、貴族は嫌い。」

「私も、うん、好きじゃあ、ないよ。」

ジュリは、血を吐くようにそう呟く。

その声が、言葉が、ヨナの耳朶にこびり付いた。

14 嵐のような訪問

「え？ お客さん？」

「ああー、うん、ごめん、もう、下に来てて、良かったら食事つくってほしいんだけど……………嫌？」

「そうじゃなくて、ただ、ヨナが誰か連れてくるって珍しいなーって思っただけ。いいよ、作るよ。」

「なんか、ほんと、突然でごめん……………」

「うーん、できれば前もって言うといてほしかったかな。」

「いや、本当に面目ない。」

「ま、いいよ。それで、友達？」

「友達っていうか…………。仲間、いや、戦友かな？」

「なら、一杯美味しい物を食べてもらわないと。それで、ヨナと一緒に凜々しく、勇ましく、素敵に戦ってもらわなくちゃ。みんなに、ヨナも私も、貴族から自由にもらえるようにね。」

「私はエリー、こっちは旦那のゴロウザエモン。よろしくね、ジュリちゃん。」「あ、は、はい、どうも。」「あたしはフルート、で、

こいつが、「あ、ハチスです、ジユリちゃんかあ、可愛らしい名前だね。」「ど、どうもありがとうございます。」「私はヤヨイ、彼はミナヅキです。」「は、はい、覚ええました。」「別に覚えなくていいです。」「え、あ、す、すみません。」

ヨナが革命軍の幹部達と説明した彼らは、妙な勢いと熱をもっている。とジユリは思った。ヨナはなんとなくその中で距離を置いていて、なんだかいつも以上にたくさんのことを隠しているように見える。

エリーと名乗ったエルフのシスターや、ハチスという魔術師、フルートという召喚術師は、笑顔で何度も話しかけてきてくれたが、ジユリはどうしても見定められているような気がした。決して下世話な視線ではなく、どちらかというと心配されているようだったが、正直あまりいい気はしない。

ヤヨイとミナヅキという便利屋は、あからさまに壁を作っているし、ゴロウザエモンという男はただひたすらに無口だ。

ぱたぱたと料理を忙しく作っている間は、彼らは勝手にのんびり話をしていた。革命軍の話だろう。ジユリはなんだか、聞いてはいけないような気がして、意識して料理に集中した。エリーやフルートは手伝おうかとも訊いてくれたのだけれど、お客様に手伝わせるのもいけないからと、丁重にお断りした。

その断った時のエリーの視線が、また、酷くねっとりとしていたように思えた。

料理が一通り済んでしまえば、あとは結局談話の輪に入らないわけにもいかない。ジユリは、そつと端の方の席に座り、ぼんやりとその場を見ていた。

悪い人達ではないのだろうと思う。

ただ、ジュリとは少し世界が違っただけ。
静かに会話に耳を傾け、なんとはなしに話を聞いていた。

革命前で皆、なんだかはしゃいでいるようだった。祭というのはただの偽装だったのか、本物なのか、分からなくなるくらいだ。会話は底抜けに明るく、祭特有の雰囲気宿している。

「あらら、じゃあ、ハチスくんは思い人に告白する前に勢いつけようって、革命軍に入っただの？」

エリーのさばさばした声が響く。少しだけハチスをからかうような、そして単純に楽しそうな声だ。片手には蒸留酒の杯。もう片方の手にはフォークを握り、料理についてはこれ美味しいわね、などとジュリに感想をくれる。ジュリは曖昧に頷くだけだが、エリーはまたすぐにハチスとの会話に戻る。

「いいでしょ、別に。仕事はちゃんとしてるでしょ。」

「ふふふ、私は応援してるわよ、恋する魔法使いさん。素敵じゃないの、愛しの彼女に思いを打ち明けようとして、でも少し自信がなくて、それで革命、だなんて。」

「……………僕の方はいいから。エリーはなんで？」

ハチスは顔が赤い。照れているのだろうか。なんとか話を変えようとしているのが丸分かりだ。

「いつになく、余裕がないわよ、ハチスくん。……………私は気分よ。旦那も私も、少し退屈だったし、久しぶりに暴れなくなっちゃって。ちようど新しい領主の度重なる増税が頭にきてたし、ね。私たちは

結構風来坊だから別の街に行っても良かったんだけど、ここに昔から知り合いが住んでてね。頼まれちゃったら、断れないじゃない？」

「ああ、それで。フルートは自由に召喚術の研究がしたいのに、貴族に邪魔されるから、って言ってたかな。」

「あの子らしいわね。素直でいい理由だわ。」

その、問題のフルートはというと、何故かもう完全に酔っぱらっていて、ゴロウザエモン相手に延々自身の趣味の話をしている。絡み酒なのだろう。顔を真っ赤にして、竜とは、竜が、竜の、と、夢中になってゴロウザエモンに竜について講義していた。

「だからねー、竜って言うのは、神話とか古代の書物に出てくる、でっかいドラゴンと、あたしの召喚するような小型の竜とがいるんだよ。そもそもね、古代竜、ああ、分けて言う時はそう呼ぶんだけど、その古代竜はとにかく大きいんだよ。んで、神聖にして最強、美しく、長命なの。ちよっと、ゴロウザエモンさん、聞いているの。」

「うむ、聞いている。」

「そう、良かった。でね、古代竜の翼は空を覆うほどに大きくてね、鱗は透き通っていて、宝石みたいで……。でもね、違うんだよ。そうじゃないの。あたしの喚ぶ竜達の方がずっと可愛い。古代竜は賢く人語を解いたと言われているけど、竜だって意思の疎通は図れるの。古代竜と比べれば、ちよっと大きくて羽の生えた蜥蜴とも言われるけど、でも、よく考えてみてよ、そもそも、古代竜は滅びた種族で、あたしの喚ぶ竜達は今も生きてるんだよ。もう存在しない竜と、喚べば応えてくれて、あたし達を広い空の何処までもつれてってくれる竜。どっちがいいかなんて、明らかでしょ。竜達の方がず

つといいんだよ、分かる？ ゴロウザエモンさん。」

大きな身ぶり手振りを交えた説明で、料理や杯が溢れないかとジユリははらはらした。幸い、エリーとハチスが会話の片手間に慣れた手つきでフルートから離していたので、皿に少しフルートの手が当たっただけだった。

ゴロウザエモンは皿の心配をする余裕はないようで、熱くなったフルートのを前にたじたじである。

「う、うぬ。おそらく。」

「この前もね、キバナを喚んだんだけど、って、ああ、ゴロウザエモンさん、キバナを見たことないね。あのね、あたしの一番仲のいい竜でね、氷の息吹を吐けるんだけど、身体はとっても温かいんだよ。透明な鱗と白銀の毛並みがすごく綺麗で、優しい美人さんなのね、でね、」

「……………うぬ。」

フルートの異常な勢いに、巨漢のゴロウザエモンが押されている。彼が周囲に視線で助けを求めているのは皆知っているが、救いの手は差し伸べられない。やがて、彼は諦めてさっさと酔い潰れてしまおうと、杯を空けるペースを上げていった。料理に手を伸ばすとき、ジユリに軽く頭を下げる。礼儀正しい人なのだろうとジユリは思いながら、軽く会釈し返す。

端の方で大人しく平和的な会話をしているのは、ヤヨイとヨナだった。ジユリの料理をばっばつまみながら、若干言葉足らずな雰囲気話している。

「ミナヅキは、私には優しいですから。別に、一緒にいるのは恩義とか、借りとか、そういった理由ではありませんよ。」

「そうか。けど、少し重荷だったりしないの？ どう考えてもあれは寄りかかりすぎだと思うけど。」

お互い特に目を合わせない会話だな、とジユリは思う。けれど、その様子が逆に親しげに見えて、少しだけヤヨイを羨ましく感じた。

「いえ、決してそんなことは。彼が眠っていてくれないと、半魔である私は食料が足りず、自分が保てなくなります。最近が悪魔も自分の一部だと思えるようになったからだいぶ良くなりましたが。」

「そう思えなかったころは大変だった？」

「はい。私と悪魔は意志が独立していて、別の人格でしたから。今も少し違いますけど、ハイになる、といったところですし。前は、ミナヅキが眠っていないと悪魔が表に出てきて、私の意思に関係なく大暴れしていました。」

「へえ、それが、ミナヅキの言ってた、悪魔に時間を売り渡すって奴だったってことか？」

「当時、彼が眠っていた時間の半分以上が抜け落ちているんです。彼の身体はその時間の存在を認識していないし、世界はその時間に気付いていない、と言いますか。」

「なんか、難しいな。」

「はい、とても難しいです。乗り越えるのも難しかったですよ。と

ても。でも、必ずしも辛いだけではなかったですから。」

ヤヨイは綺麗な笑顔で頷いた。頬がほんのり赤く染まっているから、若干酔っているのかもしれない。

なんとなく、その流れでジュリの視線はミナヅキを探す。けれど、見つからない。いったい何処にいるのだろうと、不思議に思っていると、背後から声を掛けられた。

「ジュリ、だっけ？」

「え、あ、はい。」

ミナヅキだった。面食らって、身を竦めた。息を呑む音が、彼に聞こえていなければならないと思う。気難しそうな少年は、気だるげにも見えた。

彼はジュリの動きをまるで気にした風もなく、舐め回すような視線で見定める。ジュリは居心地が悪くて、姿勢を変えた。けれど、ミナヅキの視線から逃れるのも失礼な気がして、せめてもの抵抗に睨み返してみたものの、ミナヅキは一切反応しなかった。そして、一言、ヨナに言い放つ。

「リーダーはこの娘のために革命起こすんだ？」

一瞬、言葉の意味が理解できなかった。
彼は、ヨナに向かって、そう言った。

まるで、ヨナがリーダーであるかのように。

室内の空気が凍る。

エリーは僅かに笑顔を引きつらせ、ハチスは苦い苦い苦笑。

フルートは酔いも吹き飛ばして真っ青になり、ゴロウザエモンは無表情をさらに硬くしていた。

ヤヨイはそつと隣のヨナの顔を窺っている。

「この娘から、リーダーの革命は始まったんだろ？」

追い打ちのようにもう一度。

悪意も、好意すらない言葉。

ミナヅキの言葉にあるのはただ、事実の確認だけ。

ヨナからの否定はない。

周囲からも否定はない。

ジュリも、なんとなく気付いてはいた。

ただ、できれば彼の口から聞きたかった。

わがままかもしれないし、勝手な幻想かもしれない。

彼からそう言ってくれたらいいと思っていた。

黙って立ち上がり、二階に上がる。

逃げるような早歩きはすぐに小走りになった。

ヨナがリーダーで良かった。

そして、どうしてよりもよってヨナがリーダーなの？

相反する二つの感想が、ジュリをその場から逃げ出させた。

息が苦しくなって、頭がぐらぐらして、思考がまとまらない。

ヨナに名前を呼ばれたような気がした。

日常の崩れる音は、たぶんただの幻聴だろう。

きつと、もとからそんなものは、何処にもなかったのだ。

二人とも、存在しない平穏な日々似た別物を、後生大事に抱きしめていただけだろうから。

15・今の自分にできること

問題の、やや地味ではあるけれど可愛い少女が、自室の戸を閉める音が響いた。

ミナヅキは興味ないと言わんばかりに、めばしい食料を探し始める。ばいばいと出されていた料理を口に放り込み、蒸留酒の杯を空けた。ヤヨイは複雑そうだった。ミナヅキの動きを目で追いながらも、いつものように甲斐甲斐しく手を出すことはなく、困ったように溜め息を吐く。エリーとハチスも、ミナヅキの行動の意図は分からないでもないもので、何とも言えない。ゴロウザエモンは無論、押し黙ったままだ。

一番分かりやすい反応をしたのはフルートだった。

「ミナヅキ、おまつ、な、何考えてんだよっ！ ミヤマは言うなっ
て言っただろっ！ なんだあんなことっ……………、もうわかんないよ、お前、なんなんだよ、何がしたいんだよっ！」

勢いよく立ち上がり、掴みかからんばかりの勢いで語り始めたものの、結局は上手く言えなくて諦める。いつもならハチスかエリーが代弁するが、今回は二人とも傍観していた。怒りからか、言葉にできない悔しさからか、フルートは思いっきり机に拳を降り下ろした。皿が跳ね、飲み物が少し溢れる。ミナヅキは苛立つフルートを一瞥して、食事を続けた。

そして、料理の大半を片付けて、最も冷静なミナヅキが口火を切る。

「隠しててもいずれ分かるだろ、『ヨナ』がリーダーだつてのは。もしそれを革命で『ヨナ』が死んでから聞いたら、全部終わった後に聞いたら、彼女はと思うかな。信頼できる人も仕事も家も失つて、真実を知った時、彼女はもうするのかな……、とまあ、そんなことを考えてたんだけどね。」

軽くおどけた言い回しだった。

フルートは虚を突かれたようだったが、エリーとハチスは余計に表情を苦くする。エリーがこめかみに手を当てて、息を吐く。その音がやたらと部屋に響いた。

「どのみち、正体明かす頃合いだっただろ。自分から言うのかなと思つて見てたけど、あのままだと確実に今日は言わなかっただろ。ほら、さつさと覚悟を決めたらどうなのさ、『ヨナ』。」

ミヤマは俯いたままだ。答えないのか、答えられないのか、横で見ている仲間達には判断できない。ただ、彼が必死なことだけは伝わってくる。荒い呼吸と、彼の握った拳が小刻みに震えていることが何よりの証拠だ。

このミヤマという少年は、剣の腕は確かだし、冷静に判断をすることもできる。革命軍なんて大層なものを作るくらいのカリスマ性もあるし、頭のキレだつて悪くない。けれど、いつもどこか危うさがある。脆いと表現してもいい。危なっかしくて、これ以上負荷をかければ壊れてしまいそう。そんな面もあわせ持っている。

そして今、本当に砕け散ってしまうのではないかとフルートは思った。フルートだけではない。たぶん、この場にいた全員が同じ感想を持っている。にもかかわらず、ミナヅキは止めなかった。

「重いもん背負ってるとは思っよ、年齢の割にね。僕はその年でそこまでのもん背負ってなかったし、今だって背負いたくもない。だから、リーダーの辛さは僕にはわからないよ。でも、それはリーダーが自分で選んだものだろ？ 自分で望んで、それを背負ったんだよな？ 僕は背負うことを選ばなかった。リーダーは背負うことにした。違う？」

ミナヅキはひねくれた言い回しをよく使う。だが、その内容は実のところいつも正論だったりするのだ。突き放している態度ではある。けれど、ミナヅキは普通そこまでヤオイ以外の人間に関心を示さない。わざわざこうして忠告すること自体、彼なりの精一杯の対応だ。面倒そうな顔をしながらだが、きちんと彼は口に出してくれている。

その不器用ではあるけれど真摯な言葉はミヤマの心の奥に入り込んできた。

「なら、最後まで背負うのが筋だろ。自分が足を止めるのを、その重さのせいにして良いはずないんだよ。」

ミヤマはなにも言わない。言えない。ぜえぜえと憐れなくらいに息を乱して、俯いたままだ。

目を合わせようともしない。合わせられない。固く握った拳だけではなくて、やや線の細い身体も小刻みに震えていて、いつその場に崩れ落ちてもおかしくない様子だった。

ミナヅキもそんなミヤマの無反応を責めはしない。ただ、淡々と自分の言いたいことだけを、一つずつ積み上げていく。

「いくら重いからって、逃げんな。責任は果たせ。自分の不始末で

人を、しかも、一番大事な人を、泣かせんな。」

言い切って、ミナヅキは口を閉じる。これ以上言うことはない、その態度が物語っていた。

ミヤマは沈黙したミナヅキをぼんやりと見つめている。

かたかたと揺れる背中からは、まるで寒さを堪えているかのようだ。彼の言葉を反芻しているのだろうか。

フルートはそつと俯き気味なミヤマの表情を窺った。

苦しそうで、泣くのを我慢しているようにも見えて、なにか言わなければならない気がした。でも、やっぱり口下手な彼女にはなんと言えれば良いのかわからない。ぱくぱくと何度か口を開閉させたフルートの横から、ハチスがミヤマに声をかけた。

「ミヤマ、ミナヅキくんのやり方は強引だったけど、あながち間違っちゃいないと僕も思うよ。」

「ハチスまで、んなこと言って、」

はつきりとミナヅキの肩を持つ発言に、フルートが前のめりになる。けれど、ハチスは彼女の肩をやりわりと押さえながら、静かに声を重ねた。

「事実だよ、フルート。ミヤマが言ってないことも、言わないままじゃ駄目だったこともね。……………んー、僕も早くエリカに会いに行かないとなー。ふらふらしてて、そこから野垂れ死んだら、笑えないし。しかし、気が重いなー。」

ハチスが気を利かせて空気を和らげようとする。エリーはすかさずそれに食いついた。からりとした声でハチスをからかう。

「エリカちゃん、って言うのね、ハチスくんの思い人。可愛い名前じゃない。」

今度はハチスも心の準備ができていたのか、堂々とのろける。にっこりと完璧な笑顔で答えた。清々しい好青年然とした、わざとらしいくらいに見事な笑顔だった。

「うん、強くて凛々しくて美しくて、名前以上に可愛らしい、世界一素敵な女性だよ。……………随分長いこと会ってないんだけどね。」

「それじゃあ、楽しみね。きつともっと綺麗になってるでしょ。」

「勿論、前よりも魅力的になってるに決まってるでしょ。じゃ、さつさと革命を成功させないと。ミヤマ、僕らはそろそろ帰るけど、ジュリちゃんときちつと話し合っただよ、いろいろとね。」

「大将、逃げてても始まらないわよ。」

エリーは最後に果実酒を瓶ごと呷って、皆に身振りで帰るように伝える。ミヤマはぼうつとする頭でそれを見ていた。

ハチスがフルートを押さえて、さつさと外に出す。フルートはぎやあぎやあと文句を言っていたけれど、結局、最後はジュリとミヤマの問題なのは確かだかな、と捨て台詞のように言い残して、ハチスに連れられ出ていった。

ヤヨイは冷静にジュリによろしくと挨拶し、ミナヅキは残った料理を頼張って、美味かったって言っというて、とヨナに伝言を頼んだ。

ゴロウザエモンとエリーも同じように料理の礼を述べ、急に来て嫌な思いさせちゃってごめんなさいねとも伝えてほしいと言った。

全員が帰ってしまうと、途端に部屋は静かになった。雑然と机の上や椅子周りが散らかっていて、空気にはまだ熱気の余韻が混ざっている。祭りの後の静けさと、嵐が去った後の乱雑さだけが残っていた。

黙々と部屋を片付けていると、ようやく落ち着いてきた。少なくとも、無様に乱れていた呼吸は、なんとか落ち着いていた。心臓は未だにはくばくと暴れ狂っているけれど、それはどうしようもない。

一定周期ごとに不安げに天井を見上げる動作を、無意識のうちに繰り返していた。当然、階上から音がするなんてことはなく、天井を見上げたところでジュリがどうしているのか分かるはずもないのだが。

ホットミルクを作ろうか悩んだが、手ぶらで行こうと決める。それで間を持たせたいというのは、自分の甘えだろうから。

階段に足をのせる。普段は別段意識しないが、今はそうでもしないと彼女の部屋まで行けそうになかった。

ぎしりと床が軋む。そんな当たり前の音が、印象的だった。

二階は遠いようで、とても近くて、だけどやはり遠い。

エリーは逃げても始まらないと言った。

だとしたら、まだ何も始まっていないのだろうか。

自分は逃げてばかりで、彼女は苦痛から逃れてここに来た。初めから逃げていた二人の始まりは何処にあるのだろうか。

お互いに本名なんて知らない。

偽名ですつと呼び合ってきて、いつからか、その偽名は本名と同じかそれ以上に大切になっていた。

ハチスは、ジュリと話し合えと言った。

なにを話し合っただろう。

これまでのこと？ 今のこと？ これからのこと？

それとも、もっと他のことだろうか。

お互いの言っていないことも、だろうか。

ミナヅキは覚悟を決めると言った。

どっちとしての覚悟だろう。

革命軍のリーダーのミヤマとしての覚悟か。

ジュリという時のヨナとしての覚悟か。

自分は、未だになにも分かっていない。

ジュリは何度もかっこいいと言ってくれたけれど。

全然まだまだ、なんとも情けないばかりだ。

先は長くて、頂点は遙か雲の上のそのまた向こうで、見えないくらい。

剣がちよつと使えるだけで、惨めなくらいに臆病な自分。

そんな自分は、いつかかっこいい人間になれるだろうか。

いつになってもなれないのかもしれない。

永遠に大したことのない人間のままかもしれない。

けれど、逃げるのは違う。

せめて、背筋を伸ばして前を見よう。

そして、こんな自分をかっこいいと言ってくれたジュリときちんと向き合おう。

どれだけ遙か遠くても、それでもいつか。

いつか、立派な本当にかっこいい人間になれるように。

一歩ずつでいいから前に進むことだけは止めないでいよう。

短く息を吐き、彼はジュリの部屋の戸を叩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4707t/>

嘘と革命

2011年11月16日15時15分発行